
僕と彼氏と兄二人

瀬見尾津凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼氏と兄二人

【Nコード】

N7805M

【作者名】

瀬見尾津風

【あらすじ】

極度のブラコンである双子の兄が原因で、僕は彼女にふられてしまふ。

いい加減兄たちに『弟離れ』してもらいたいと仲間たちに相談したら、「彼氏が出来た」と告白する作戦に。話を聞いた知人がその彼氏役を買って出たが、知人は僕のことが本気で好きだった！
周囲の変人に振り回されながら、新たな世界へと走り出す僕の物語。

彼氏が、出来た

「ごめんなさい、あたし……もう、耐えられないっ」

たたたつ、と駆けて行く彼女。

「ちよつと待つて　！」

思わず追いかけてようとしたが、僕はすぐに諦めて呆然とその背中を見送る。

三カ月付き合つて、今度こそうまくやれるはずだった。

「あー、兄さんたちのせいだ」

したくもないのに溜め息が出る。僕の兄たちがいかに迷惑な人か、彼女も理解してくれていたはずなのに。

僕は顔を上げると、仕方なく帰路へ着いた。

「ただいま」

家へ帰ると、夜兄の声が返って来る。

「おかえりー。夕飯は？」

靴を脱いで「食べてきた」と、中へ入る。

「さきちゃんとデートだったんでしょ？　どうだった？」

と、居間でくつろぎながら僕へ問う月夜つきよ、通称夜兄よるにい。

「……フラれた」

まるで母親みたいだと思いながら、僕はそれだけ言つと椅子へ腰を下ろした。何だか、悪夢を見ているようだ。

「え、マジで？　どうしたの？　喧嘩したの？」

夜兄が僕の顔をじつと見たが、僕は構わずに言う。

「別にどうつてことないよ」

まさか、兄さんたちが会う度に色々な事をしつこく尋ねるからだなんて言えない。言つたところで、彼らは僕の為だと言つて聞かないだろう。

「……そっか。まあ、そう落ち込まないで」

と、にこりと笑う。ああ、マジでうざい。

僕が心の中で悶々としてしていると、朝兄がお風呂から上がってきた。
「おかえり、デートどうだった？」

タオルで頭をぐしゃぐしゃしながら、僕の向かいへ座る朝日あさひ、通称朝兄あさにい。

「駄目だよ、朝日。愛斗まなと、振られちゃったんだから」

と、夜兄が言くと、朝兄は目を丸くした。

「マジかよ？ 何でだ、何があっただんだ？」

「……別に」

とりあえず落ち込んでるふりをして、部屋へ行こうと思った。けれども同じ顔をした兄二人は僕を憐みの目で見つめる。

「そうか、きつと次があるさ。そう落ち込むなって」

「明日は愛斗の好きな焼き肉にしようか」

僕は適当に頷くと、すぐに自分の部屋へ向かった。

両親から離れて気付いたことは、兄たちの方が何十倍も過保護だということだった。母も過保護ではあるが、週に一度メールか電話すれば安心してくれるし、父はあまり意見しないから気が楽だ。

それよりも夜兄の方が母親らしいし、朝兄の方が父親らしい。もちろん、良い意味ではなく、だ。

部屋へ入り、ぱちつと電気を付ける。フローリングの冷たさを足の裏に感じながら、ベッドへ倒れ込む。

「あー……」

疲れた。兄たちが原因で彼女と別れたのは、これで何度目になるだろう？

コンビニのバイトをしながら、二週に一度の割合でライブハウスのステージへ立つ。仲間たちとのスタジオ練習は週に一度、ライブが近いと週に二、三日はある。

しかし、はつきり言って僕はほとんど兄二人に養われている状態だった。光熱費は兄二人が半分ずつ出しており、僕が唯一払うのは

家賃の一割程度。稼ぎが少しでも減ると、兄たちが「払わなくていい」と、うるさい。

「僕だって、もう大人なのに」

ライブハウスの楽屋で思わず溜め息をついた。

「お前の兄貴、また来てんの？」

と、ギタリストの友一が聞いてくる。

「うん、来てる……」

今回はトリを務めるだけに、兄二人の興奮も増しているはずだ。

「ここ、二階席あるんだから、関係者で来ればいいのにな」

と、ベーシストの浩美ひろみも言う。

「うん、僕もそう言ったんだけどさあ……」

はぁ、と思わず溜め息が出た。これから出番なのに、これでは良くない。だが、やっぱり僕はこの前のことを根に持っているわけで「大変だねえ、相変わらず。でもお兄さんたち来ると、すごい盛り上がるよね」

と、ヴォーカルの清男、通称キオが面白そうに笑う。

ステージの方から、他のバンドの演奏が響いてくる。披露するのは四曲のはずだから、これが終わったら僕たちの番だ。

「僕だってそろそろ限界だよ。彼女にはまた振られるし」とすると友一まで笑いだした。

「何だよ、また振られたんか！ 可哀そうやなあ、愛斗は」

自称大阪生まれのエセ関西弁にムツと来る。

「僕は困ってるの。いい加減弟離れしてくれないと、結婚すら出来ないよ」

「そうだなあ、彼女に紹介するとすぐに振られるんだもんな」

と、浩美。少しは真面目に考えてくれてるらしいが、あまり期待はしないでおこう。

「いつそのこと、彼氏ができたっていうのは？」

「は！？」

浩美の突拍子のない提案に、僕は大きな声を上げてしまう。やは

り期待しなくて良かった。

「ちよつと待つて、何でそこで彼氏なの？」

すると、友一が便乗した。

「良いなあ、それ！ 弟に彼氏なんていたら、びっくりするで！」

「いやいやいや」

「本気なんですーって言ったら、自然と離れて行きそうだねえ」

と、キオまで。

「じゃ、じゃあ、誰が彼氏になってくれるのさ？」

「俺で良ければ協力するで」

一番に名乗りを上げる友一だったが、浩美がそれを却下した。

「駄目だ。仲間内で彼氏なんて、都合良すぎるだろ」

いつの間にか音が変わって、演奏が終わりに近づいていた。彼らが戻ってきて、スタッフが準備を整えたら僕たちはステージの上だ。

「そうかあ？ 意外と、実は出逢った時から運命感じてましたーみたいなあ？」

「ないでしょ。面白がってやると、逆に愛斗が可哀そうだよ」

キオに窘められて、友一が口を閉じた。僕は呆れてまた溜め息し、気分転換に楽屋内をうろうろ歩く。

「どうせなら、他のバンドの奴らか、兄貴たちの知らない友人にしたらどうだ？」

「でも、そんなことに協力してくれる人なんていないよ」

鏡で衣装を確認する。白いＴシャツに黒のベスト、灰色のジーンズ。

「そうだよな。彼氏ってことは、作戦がばれた後も、その気を疑われるだろうしなあ」

「むしろ彼氏にやるくらいなら、俺たちが！ って、ならへんかな？」

「だから友一、それこそ禁断の愛だよ」

靴だつてちゃんと履いたし、スティックの用意も出来てる。

「何が禁断の愛だつて？」

と、声をかけたのは、いつの間にか戻ってきていた他のバンドのギタリストだった。

「おう、お疲れさん。愛斗がな、兄貴たちに離れてほしくて困ってるんや」

「で、彼氏ができたって告白するのはどうかという話をだな」
友一と浩美の説明を受けて、彼が僕を見る。

「飽くまでも作戦だけだな。ジュン、お前協力するか？」

と、浩美に呼ばれた純は、僕の身体をじっくり見ると笑った。

「期間はどれくらい？」

「決めてないが、まあ、三か月もあれば十分だろう」

「ちよつと浩美、勝手に決めないでよ」

と、僕は言う。けれども、純は僕の肩へ手を置いて言った。

「どうせ兄貴たち、またこっち来るだろ？　良いじゃん、やってやるよ」

「ええ？　ちょ、本気なの？」

にこにこ笑う純。周囲を見回すと、話を聞いていた一同がにやりとする。

「いや、あのー……」

「ほら愛斗、行くよ」

と、キオが僕にスティックを渡し、納得の行かないまま楽屋を出た。

「あ、あの、その……彼氏が、出来たんだ」

朝兄と夜兄が、同じ顔で同じように呆然とする。

「ジュエルビートルでギターやってる、高野純って言います」

僕の気も知らずに愛想笑いを浮かべる純。

「えつと、今まで黙ってて、ごめんなさい」

仲間たちに提案してもらった言葉を紡ぐ僕。本物の人は、兄弟や家族にカミングアウトするのに、とても勇気がいるらしい。

「その、本当は僕」

「そうか、良かったな。おめでとう、愛斗」

「彼女と長続きしないのは、そういうことだったんだね」

「え？」

どこかすっきりした様子の兄たちに、僕は思わず戸惑った。な、何だこれ……すごく複雑な気分だぞ。

「純くん、弟をよろしくな」

「ちゃんと幸せにしてあげてね」

横目に見た純も少し戸惑った様子で返す。

「あ、はい」

何だろう、とつてもややこしいことになってきた気がする。

帰宅した後も、兄たちの僕に対する態度は変わらなかった。どう見たって僕は普通の人間なのに、彼らは僕をそういった人間だと受け止めてしまったようだ。

「純くんとは、何で付き合うことになったの？」

「えっと、前から何回か対バンさせてもらって、何ていうか、その……自然に？」

これが作戦だとばらしたら、兄たちはやはり安心するのだろうか？

「そうか。告白はどっちからだ？」

「えっと……純の、方から」

今まであまり名前を呼んだこともないような間柄だった為、改めてその名を言うとは違和感を覚える。

「なるほど。前から思ってたが、愛斗って可愛い系が好きだよな」

「え？」

今の相手は男なのに可愛い系とは、どういうことだ。

「うん、俺もそう思ってた。純くんっていわゆる可愛い系イケメンだし」

「……あ、うん、そ、そうかもね」

ばらすタイミングを密かに計っていたのだが、ばらしにくくなってきた。

今日はやめて、明日以降にしようか。あ、でも三カ月とか浩美が
言ってたな……。うん、明日には絶対に言おう。じゃないと僕が変に
なる。

きっかけは兄さん

しかしその翌日も、兄さんたちはいつもと変わらず僕に接してきた。

「バイト何時から？」

「え、十時だけど」

「何だよ、彼氏からモーニングコールでもきたか？」

「え？」

社会人の兄たちに本当のことを言おうと思って早起きしたのに、何か違うぞ。

「いや、別に……」

と、僕もなんだかんだで臆病だったりする。違う、違うんだ！

「じゃなくて、あの、言いたいことがあるんだ」

ネクタイを締める朝兄と、のんびり朝食をとる夜兄が僕を見た。

「あの、昨日のあれは……その、本気じゃなくて」

「どういうことだ？」

「本気じゃないって？」

「あ、あの……だから、彼とは、その」

何て言えばいいのだろう？ 兄さんたちを驚かせたくてやりました？

「本当は付き合ってない、っていうか……」

口をもごもごさせる僕を見て、何を思ったのか夜兄が言う。

「まだ発展途上ってこと？」

「ああ、そうか。そうだよな、初めての彼氏だもんな」

と、朝兄が笑いながら鞆を手取る。

「行って来ます」

そして玄関へ向かい、すぐに家を出てしまう。

「いってらっしゃーい」

と、夜兄。そういうことじゃないんだと弁解したくても、もうや

る気が失せていた。まだ、朝なのに。

バイトを終えて帰路についていると、携帯電話が鳴った。

「はい、もしもし？」

『あ、愛斗？ どうだった、兄貴たち』

純だった。

「うん、それなんだけど……完全に受け入れられてるよ」

機会越しに笑い声が聞こえる。

「笑い事じゃないよ」

『あはは、ごめんごめん』

全く困った彼氏である。

「で、何の用？」

『いや、ただそれだけ』

「じゃあ切るよ？」

『ちよつと待つて。でもさ、愛斗』

「何？」

『まだ三カ月あるんだし、その内に嫌気がさして離れるかもしれないぜ？』

「……それなら良いけど」

『オレは別に、嫌じゃないし』

ちよつと真面目な口調だった。友一みたいに面白がっているのかと思って僕は言う。

「僕は嫌だけどね」

というか、受け入れられたこと自体が不満だ。僕は女の子が好きなのに。

『はは、そう言っなよ。気長にやって行こうぜ』

と、純はまた笑う。もう本当に、訳が分からない。

小学校で教師をしている夜兄は、だいたい七時には帰宅している。
「おかえりー、愛斗」

「ただいま」

廊下を挟んでいつものやり取りをすれば、台所から良い匂いがしてくる。

「ああ、カレーか」

朝兄と違って料理の上手い夜兄だが、たまにこうして手抜きをする。まあ、別に構わないんだけど。

自室の扉を開けて中へ鞆を放り投げる。それから台所へ行って冷蔵庫を開けた。

「ねえ、愛斗」

「何？」

ペットボトルのお茶を取り出し、もう片方の手で棚からグラスを取る。

「昔からそうだったの？」

「え？」

振り向くと、兄さんはこちらを見ていなかった。

「男の子が好きだったんだ？」

「え、ああ、まあ……」

曖昧な返答を返したつもりだが、肯定してしまったのでは、と、僕は慌てた。

「あ、でも夜兄。その、今まで付き合ってきた彼女のことは、本気だったんだよ」

それでも兄さんはこちらを見なかった。やはり、ショックを受けていたのだろうか。

「そうだよね……愛斗、良い子だもんね」

僕は口を閉じると、テーブルへ置いたグラスにお茶を注ぎ入れる。溜め息まじりに一口飲んで、夜兄の様子を窺う。

「……昔、小さい頃は、本当に女の子みたいで可愛かったよね」

と、夜兄が唐突に言う。

「……そうだね」

実家のアルバムには、頭にヘアピンを付けられた幼い僕がいる。

そのそばにはいつだって、朝兄と夜兄がいた。

「ずっと気付かなくて、ごめんね」

そう言った兄さんの姿に、胸が痛む。僕は、ひどい嘘をついてしまったらしい。

「夜兄、ごめん。本当は、その……」

伝えなきゃいけないことがある。僕が少し大きく息を吸った時、玄関が開いた。

「ただいまー」

朝兄だった。夜兄がすぐに「おかえりー」と、返す。何てまた夕イミングの悪い……。

「今日はカレーか。ちょうど食べたいと思ったんだ」

と、入って来るなり言う朝兄。

「でしょ？ 俺もそう思ってたさ」

先ほどまでの空気が無かったように、夜兄はにこつとする。

双子である兄さんたちは、きつと僕に対する考え方も同じなのだろう。それはつまり、僕の感じる罪悪感も二倍なわけで。

朝兄がスーツのポケットから携帯電話を取り出し、テーブルへ置く。それからスーツを脱いで、ネクタイを解いた。

「あ」

ふと見たら、朝兄の携帯電話のライトが点滅していた。すぐに兄さんもそれに気が付いて、取り上げる。

「お、母さんから電話来てた」

と、ボタンを押して耳へ当てる朝兄。

僕はその様子をばーっと眺めていたが、はっと気が付いた。僕に彼氏ができた、と、報告されたら大変だ！

「あの、兄さん、あの、あの」

「ん？」

「か、母さんと父さんには、まだ彼氏のことは内緒に」

朝兄が頷いた直後、母さんが通話に出たようだ。

「母さん、何の用だよ？」

と、機会越しに兄さんが会話を始めた。それを見て、思わず溜め息をつく僕。

こんなことになるのなら、彼氏ができたなんて言わなきゃ良かった。

しかし、二人に本当のことを言えないまま三日が過ぎた。言おう言おうと思っではいるのだが、どうも二人の優しさに負けてしまう。スタジオで個人練習をしている時も、僕は憂鬱だった。

力任せにドラムを叩いても、納得のいく演奏にはならない。

「くそっ」

と、スティックを振り下ろすと、勢いのあまり二つに折れた。

「……」

他にもスティックは持っているから良いけれど、この苛立ちはどうしたものか。

「あーあ」

でも、僕が音楽を始めたきっかけも兄さんたちだったな。

二人が中学二年になった時、ギターを習いたいと言いだしたんだっけ。それで、近くの音楽教室へ体験入学に行った時、その隣でドラムの教室が開かれていた。二人がギターを習っている時に、僕は母さんへドラムをやりたいと駄々をこねたのだ。

今では良い思い出だが、それと同時に何故、あの時僕はドラムをやりたいと思ったのか、不思議でならない。音楽なんてさほど興味がなかったし、ドラムがどういった楽器であるかもよく知らなかったはずなのに。

「……よし」

それでも僕は、こうしてドラムを続けている。プロのドラマーになるのを夢に見ている。

折れたスティックを拾い上げ、僕はまた練習を始めた。

本当のこと

あつという間に一週間が過ぎると、僕はだんだん家に居づらくなってきた。当たり前である、本当のことを未だに言えずにいるのだから。

夕食を終えた時だった。朝兄と一緒にぼーっとテレビを見ていると、僕の携帯電話が鳴った。

「誰から？」

と、尋ねる朝兄。僕は画面を見て、答えは返さずに通話に出る。

「もしもし？」

『よう、愛斗。今、ヒマ？』

純だった。朝兄に悟られないよう、すぐさま自室へ向かう。

「う、うん、暇だけど」

『それは良かった。あのさ、明日会える？』

「は？」

閉めた扉の向こうで、風呂から上がってきた夜兄が朝兄と何か会話するのが聞こえた。

『ライブのチケットが余っちゃってさ。愛斗、行かねえ？』

「えっと、行っても良いけど……」

『ああ、チケット代なら奢るよ。急な事だしな』

「あ、あの、そうじゃなくて」

『ん？』

「そ、それは、純と二人でってこと？」

そう尋ねると、純が機会越しににつこり笑った気がした。

『もちろん。じゃあ、六時に渋谷な』

と、通話を切る純。兄さんたちになんて言えばいいのか、僕は溜め息をついた。

結局、兄さんたちには嘘をつけなかった。純と一緒にライブに行く、たったそれだけのことで兄たちは僕を応援してくれた。

「……ねえ、純」

「何？」

開演前のざわめきの中、僕は彼へ言う。

「僕、兄さんたちに本当のことを言おうと思うんだ」

「は？」

と、目を丸くする純。

「せっかく協力してくれて悪いんだけど、もう終わりにしようよ」
横目に見た純は口をポカンと開けていた。

「本当にごめん」

と、溜め息をつく僕。

やがて純は「ああ、そくだよな」と、頷いた。

ライブは僕たちよりも名の知れたインディーズバンドのものだった。どちらかというと好きなバンドだったこともあって、僕は久しぶりに心からライブを楽しんだ。

職業病とでも言うのか、無意識に僕はドラムに注意して耳をすませたり、その動きを目で追っていた。こうして他人のライブを見ると、自分自身の成長に繋がるので、学ぶべきところは素直に学ぶうと思った。

ライブが終わると街はすっかり夜になっていた。繁華街のライトが騒々しくする道を、純と二人で歩く。

「なあ、愛斗」

「何？」

純は俯いていた。

「オレ、お前に謝らなきゃいけないことがあるんだ」
僕は何も言わずに続きを待つ。

「……オレ、すごい良いチャンスだったんだ」

「何が？」

顔を上げようとせず、純は言う。

「ずっとオレ、愛斗と付き合いたかった」

見上げた空に星は無く、僕は言葉が右から左へ抜けた頃にはつとずる。

「え？」

「だからオレ、お前のこと」

と、純が立ち止まる。

「好きなんだよ」

泣き出しそうな目で僕を真っ直ぐに見つめる。

「……え、えっと、何言ってるの、純」

意味が分からなかった。理解が出来ない展開は、先を読むこともできない。

「お前の彼氏になって、オレに惚れさせるつもりだった」

惚れるも、何も……やはり理解が出来なかった。そういう種類の人間がいることは分かっていたつもりだが、まさかこんな身近にいたなんて。

「お前が嫌なら別れよう。でもオレは、もっとお前のことが知りた
い」

頭がぐるぐると回りだす。頭痛というか、眩暈というか、目の前の現実が現実味を帯びないような、とてもちぐはぐな感じだった。

「だから愛斗、オレと付き合って」

「あ……いや、え？」

おかしいな。純が僕を見る目が以前と違うぞ。いや、もしかすると彼はずっとこんな目で僕を見てきたのかもしれない。いやいや、今はそんなことよりも、目と鼻の先にいる彼をどうにかしないと。

……目と鼻の先？

はつとすると、純が僕に顔を近づけていた。自然と僕の視線は彼の唇を見てしまう。

徐々に距離を詰める純……あと数センチのところで、僕は逃げ出

した。

帰宅してすぐに、僕はベッドへ入った。

冷めた頭で数時間前のことを考える。純は前から僕のが好きで、彼氏になつて惚れさせるつもりだった？

そんなのありえない。

「愛斗？」

朝兄の声僕を呼んで、自室の扉が開く。

「何かあったの？」

と、優しい夜兄の声。

僕は布団をかぶると言った。

「何でもない」

今更全部を話すのは面倒だった。当事者の僕でさえやこしいことを、兄たちが分かってくれるとも思えない。

「なあ、愛斗。母さんと父さんに言う時は、ちゃんと俺らがついていてやるから」

「同性愛は難しいよね。でも、悩んでないで打ち明けてくれないと、何も出来ないよ」

握りしめた手に力を込める。

ごめんなさい、朝兄、夜兄。

友達以上恋人未満

「それで？ あいつ置いて逃げたわけ？」

「……うん」

スタジオでの練習に入る前、僕は近くの喫茶店で浩美と会っていた。

浩美はどうやら純の性指向を知っていたらしく、特に困惑する様子もない。

「そうか、災難だったな」

と、浩美はおかしそうに笑う。

「笑うことじゃないよ、僕は本当に困ってるんだから」

次に会った時、どんな顔をすればいいのか分からない。むしろ、会いたくない。

「そうだよなあ……やっぱり嫌なのか？」

「うん、もちろん」

「じゃあキスしときゃ良かったのに」

「何でだよ！」

真面目な顔で言う浩美を見て、僕は相談する相手を間違えたかと思った。しかし、純と一番仲が良さそうに見えるのは浩美だったし、元はといえば浩美の発言が原因だ。

「別にいいじゃん、キスぐらい。減るもんでもなし」

「……浩美、もうちょっと真面目に考えてよ」

僕がそう言うと、浩美は急に真剣な表情になって言った。

「じゃあさ、愛斗。俺もお前が好きだって言ったら、どうする？」

「は？」

じつと僕を見る浩美。僕は、開いた口が塞がらなかった。

「な、え、何なの？」

「だから、例えばだって」

と、浩美はすぐに笑う。

冗談だったようで安心するが、純と仲がいいのだから、その可能性は拭えない。一応、これでももう三年近く付き合っているのだが、浩美はどうも考えの読めない奴だった。

「うーん……断る」

「何で？」

「何でって、それは、好きじゃないし、男だし……？」

浩美が満足そうに頷く。

「だろ？ 純にもそう言えばいい」

「……そうだね」

きっぱり断るしかないのだ。だって僕は、男を恋愛の対象にはできない。

「分かったなら、次会った時、絶対に言うんだぞ」

「うん」

「じゃないと、あいつに襲われるぜ」

と、浩美は笑う。……でも、それって純を傷つけることになる。そういうのは、あまり好きじゃない。だからと言って、彼の想いに応えるのも違う、かな？

「……ありがとう、浩美。僕、ちゃんと純と話し合ってみるよ」

そうしろ、と浩美は言ってくれたが、すぐに僕の異変に気が付く。

「え、話し合うつて何を？」

「いろいろ」

そう返して僕は先に席を立った。

僕らが歌うのは軽快なリズムのパンクロック。キオの書く詩の雰囲気壊さないよう、浩美が中心となって曲を作りあげる。

それから僕らはそれぞれの楽器をどのように演奏するか、考える。

この前のライブで見た音を思い出し、僕はリズムを刻む。

「愛斗は優しい奴だからな、迷惑なんじゃないかって思ってるんだろ？」

「昔から変わらないよね、身体は大きくなっても中身はあの頃のままだ」

久しぶりに三人が揃った休みの日、何故か僕は兄さんたちに説教されていた。

「俺たちはいつでもお前の味方だ。だから素直に頼ってくれればいい」

「愛斗が外で何しようと、大事な弟であることに変わりはないんだよ」

僕は何て言葉を返せばいいか分からなかった。

「ずばり聞くぞ、愛斗」

「うん、言つてやつて」

朝兄が深呼吸をしてから言う。

「純とは、どうなってるんだ？ 本当に付き合ってるのか？」

予想通りの質問だった。最近の兄たちは、僕を以前よりも心配し過ぎていると思う。

「……えっと」

目を逸らして考える。言うべきだろうか、素直に。

「……告白、されたんだ」

「それで？」

と、夜兄が促す。

「その……僕は、まだ、迷つてて」

朝兄と夜兄が納得したように頷く。

「で、でも、その……」

僕が本当のことを伝えようとした時、朝兄が口を開いた。

「お前はどんなんだ？ 好きなのか？」

「え、えっと……嫌いでは、ないんだけど」

「じゃあ、愛斗も彼を好いている？」

僕は頭を抱えた。

友人としては悪くないのだけれど、その微妙なニュアンスをどう伝えたら良いだろう？ 恋人にするほどではない？ 違う、友達以

上恋人未満？

「その、純とは元々そんなに親しくなかったから、戸惑ってるんだ。恋とか、彼氏とか、よく分からなくて」

僕がそう言うと、二人はどこか安心したように微笑んだ。

「そうか。なら、とことん悩めばいい」

「いつか、納得のいく答えが見つかるよ」

「……う、うん」

また言いそびれた。彼を紹介した時は、兄さんたちを騙すつもりでいたのだと。

四人でライブハウスへ向かう途中、僕は比較的まともなキオへ尋ねた。

「友達以上恋人未満って、どういう感じなのかな？」

「え、兄弟みたいな感じじゃない？」

と、即答するキオ。僕としてはもう少し悩んで欲しかったのだが、キオにとっては大したことじゃないらしい。

「兄弟、ねえ」

赤信号で立ち止まり、日が伸びてきたことを実感する。そういえば、もう七月も半ばだ。

「キスとかセックスをするのは嫌だけど、友達には言えないことを知っている、的な？」

「……キオは、そういう人いるの？」

「んー、昔ねえ」

赤が青へと切り替わる。僕らはまた歩き始めて、僕はふと思った事を口にしてみる。

「兄弟なら、良いのかもしれないなあ」

すると、キオが僕を見て言う。

「あ、でも、友達以上恋人未満って、だいたい異性だよな」

純をそれに当てはめようとしていた僕は、もうそっち側の人間になりかけているのだろうか？

苦笑しながら、僕はキオへ言う。

「うん、そうだね」

どちらにしても、純を恋人以上にすることは、きっと僕には出来ない。したくない、のが本心か。

ライブハウスの楽屋は大部屋だが、そんなに広くない。

なので自分たちの出番近くにならないと、中へは入れない。つまり、僕が純と接触するには出番が隣り合っていないなければならないのだが……タイムテーブルは見事に空気を読んでいた。

今回もまた、僕らがトリを務めて、その前に純たちのバンドがステージへ上がる。ほぼ入れ替わりに楽屋へ入るわけだ。

せめて、何か一言で良いから言葉をかけよう。

すれ違いざまでも良いから……と、心を決めて、僕は前を見た。

頬に口づけ（前書き）

B L 展開突入。

頬に口づけ

ライブハウスの中はざわついていた。何か非常事態が起きたらしく、いつもと雰囲気が違う。

「何があつたんですか？」

と、浩美がスタッフに尋ねると、予想もしない言葉が返ってきた。「倒れたんだよ、ジュエルビートのジュン君が」

ステージには暗幕がかけられ、救急車が来るのを待っているところだった。観客はざわついて、スタッフはその対応に追われている。「な、何でや？」

友一も驚いた様子で言う。僕は声が出なかった。

外から救急車の音がして、やがて裏口から救急隊員が入って来る。そしてステージから気を失っている純を運び出す。その様子を見て、僕はとつさに叫んでいた。

「行かせて下さい、彼氏なんです！」

その声が思つたよりも響いていることに、僕は気付かなかった。

純が倒れた原因は、ストレスによる貧血だった。

「……愛斗ってさ、馬鹿だよな」

「え？」

病院のベッドの上で、純が笑う。

「オレのことなんて、放つときゃいいのに」

結局ライブは中止になった。ステージの上で倒れた純を追いかけた僕が一番悪い。

「……う、うん。でも僕、純に言いたいことあつたし、さ」

「そんなの、メールでも言えるだろ」

「そ、そうかな……」

けれども僕は、純に何て言えばいいのか分からなくなっていた。みんなの前で「彼氏」だと宣言してしまつたくらいだし。

「ここが病院じゃなかったら、すぐにでも襲ってやるんだけどな」と、純。

「……お、襲うとか、襲われるとか、って、どうやるの？」
密かに気になっていた質問をすると、純が目を丸くした。

「簡単だよ。相手のケツに自分のを」

「ち、違くて！ だから、その、ど、どんな感じなのかなって」
やり方くらいはなんとなく知っている。僕が知りたいのは、もっと精神的なことだった。

「興味あるわけ？」

「ち、違う……はず」

自覚したくないだけだと、頭の片隅で僕が僕へ囁く。純に対して真面目に向き合ってみたい、と。

「じゃあ、キスするか？」

「い、嫌だよっ」

純が僕の目を見つめてくるので、僕は顔を逸らした。

「でも、嬉しかったな」

「？」

「目が覚めた時、お前がそばにいてくれて」

「……」

白い天井を見上げる純の顔は、何故だかとても綺麗だった。ストレスなんて感じないような顔でふざけたことを言う彼には、誰にも見せない弱い部分があるらしい。

「純」

「何？」

「友達以上恋人未満じゃ、駄目かな？」

「……じゃあ、触っても良い？」

と、純が僕へと手を伸ばす。

「ぼ、僕は、その……女の子しか知らなかったから、まだよく分かんなくてさ」

純の手が僕の腕を掴む。

「でも、恋人未満で良いなら、付き合うよ」

「オレは、その上には行けないってこと？」

「……分からない」

そつと純の手が僕の胸に触れ、少しびくつとしてしまう。

「キスは？」

「わ、分かんないよ。男と付き合ったことなんてないもん！」

純は上半身を起こすと、あつという間に僕の頬に口づけた。

「じゃあ、今はここまでな」

と、にっこり笑う。

僕は呆然としながら、後悔なのか安心なのか、よく分からない気持ちに悩まされていた。

「朝兄、夜兄、ごめん。僕、本当にそうなっちゃうかも」

翌朝、出かけて行く二人の背中へ僕はそう呟いた。

相変わらず兄さんたちは僕を応援しているし、離れて行く様子もない。いつまでこの三人暮らしが続いていくのか、考えるだけで嫌になる。

けれども僕は二人の知らないところで心変わりしているようだし、それを受け入れてしまった兄たちの態度は責められない。

「……もうやだ」

僕と純が付き合っているという噂まで流れ出してしまった。話題になるので面白い、と、浩美たちは何も気にしていない様子だし、ジュエルビートルの人たちも特に嫌なわけでもないらしい。

本来は良くないことだと思うのだが、僕の周りは生憎と変人ばかりだ。

けれども、もし浩美や友一、キオが男性を好きになっても、僕はきつと嫌だとは思わないのだろう。それどころか、兄たちのように応援してしまう気がする。

「……しよーがない、か」

そう呟いて、僕はバイトへ出かける準備を始めた。

純は細い。僕よりもちょっと身長が低いだけなのに、すらりとしている。

綺麗な二重は子どもっぽくて、笑った顔は童顔だ。

ギターをやっているだけあって、手は綺麗で指も長い。

どう見たって彼は僕よりも体重が軽い。

僕はドラマーだから、最低限の筋肉は付いている。というよりも、高校の時に頑張って付けた。

なので体格はそこそ良い。顔は……普通じゃないかな。目は奥二重だけど、特に不細工なパーツもないし。

兄さんたちは、ぱっと見イケメンだ。黙っていればモテるタイプだろう。母もそう言っていた。

朝兄は口が悪いし、不器用。夜兄は妙に女々しくて、草食系男子の代表みたいな感じ。

けど、僕は普通だ。あえて言うなら、上の下あたり？ いや、中の上、かな。

とにかく、僕は普通なわけだ。

他に身近なイケメンと言ったら、浩美だろうか。もう見慣れてしまったのでそうは思わないのだが、美形の部類に入るらしく女子にモテる。身長も高いからなおさらである。

友一は僕と同じで普通だし、キオは童顔だ。背が低いのも、幼く見られる原因だろう。

そう考えていくと、確かに純は可愛い系のイケメンかもしれない。

僕らの目指す方向

女の子に対するドキドキには安心感が付きまとう。末っ子で二人の兄に甘やかされて育ったせいかな、僕はどうもしっかりしている女性を選んでしまう。

それでいて、可愛い女性が好みだ。時々、突拍子もないサプライズをされるとさらにキュンと来る。

「……ごめん、純。何があったの？」

ぶわわつと眼前に咲く花々、フローラルな香り。

「花屋でバイトしてる妹がくれた」

「……へ、へえ」

サプライズは素直に嬉しい。けれども、キュンというよりはグサツと感じだった。何か、悪いものが胸に刺さった感じだ。

「彼氏が出来たっていう度にくれるんだよね、オレの妹って」と、純は言う。

「ってゆーか、妹さんいるんだ？」

「おう。その下には弟もいるぜ」

「……お兄ちゃん、なんだ」

「知らなかった？」

にこにこする純を横目に見て、僕は思わず溜め息をついた。

「はつきり言っても良い？」

「どうぞ」

「僕、純のこと全然知らないんだけど」

すると純ははっとして、またすぐに笑った。

「オレのこと知りたいのか？　だよなあ、友達以上だもんなあ」
すっかり元気になった彼は、以前よりも調子に乗っている。

どうやら、ストレスというのは僕が原因だったらしく、純はこう見えても真面目だった。罪悪感とか、後悔とか、いろいろなもので彼も悩んでいたらしい。

「ジュエルビートルでギターやってる」

「知ってる」

「曲のほとんどはオレが作ってるんだぜ」

「へえ」

初耳だった。

「あと、たまにコーラスやる」

「うん」

「あとは……そうだな、一人暮らししてる」

「あ、良いなあ」

無意識に口をついて出た。僕だって元は一人暮らしがしたかったのだ。

「あれ、お前実家？」

「ううん、兄さんたちと三人で暮らしてるんだ」

溜め息をついて見せれば、純が笑う。

「じゃあ、オレと一緒に暮らすか？」

僕は純の顔を疑わしげに見てきっぱりと言う。

「遠慮するよ」

そんなことしたらあつという間に一線を越えてしまう気がした。さすがにまだ、心の準備が出来ていないので無理だ。

「つまんねーの」

と、純は言う。

「……ってゆーか、これはどうしたらいい？」

受け取った花束に再び目を向ける。

「別に捨ててもいいし、持ち帰ってくれても良いぜ」

「うーん……」

持ち帰ったら、きっと夜兄がすぐに花瓶に挿すだろうとは思うのだが、何だか嫌だ。

「とりあえず、持ち帰ろうかな」

と、僕は言った。本心では、近所のゴミ捨て場に捨てるつもりでいる。

「お、そうか？ やっぱ優しいな、お前って」
そう言って純がまたにつこり笑う。優しいのは僕じゃなくて、純だ。

花束を捨てて家に帰ると、兄さんたちが僕を見て目を丸くした。

「遅かったね」

「ああ、うん。ちょっとね」

すると二人が顔を見合わせる。構わずに僕が自室へ向かうと、ちらつとだけ会話が聞こえた。

「変わったな、あいつ」

「純くんと会ったのかな？」

何も知らせていなかったはずなのに、何故だか二人には見抜かれていた。

自分で演奏するのももちろん好きだが、音楽は聴くのも好きだ。

バイトの帰りに寄ったCD店には、メジャーで活躍するミュージシャンたちの音楽が溢れていた。注目のロックバンドと巷で話題になっている五人組のポスターに、人気アイドルユニット、今年で二十周年を迎えるソロアーティスト。

目当てのCDを購入して、僕はふと立ち止まる。

僕らの目指す方向は、どこなのか。今はインディーズで、ようやくライブハウスで名前が知られるようになってきた。けれどもメジャーデビューにはまだ遠くて、僕らは本当にずっとこのまま、同じ道を走り続けられるのだろうか。

純の目指す方向は、僕らとは違うのだろうか。純はギターが上手いし、ファンだっているはずだ。僕らは、純たちは、何を見つめているのだろうか。

「……」

夢、か。

ライブハウスは盛況だった。

「うちのドラムとジュエルビートルの純が付き合ってるって話したら、あつという間に売れたんや」

と、楽しそうに友一が話す。

「え？」

「噂のおかげだな。ま、俺はいつもノルマ達成してるから関係ないが」

と、浩美。

「ボクも今回は全部売れたよー。愛斗様々って感じ」

「え、いや……」

キオまでそんなことを言うので、僕は居心地が悪くなる。ただでさえ、チケットのノルマは兄さんたちに協力してもらっているだけに、僕は素直に喜べない。だって僕、何にもしてないよ？

「今回は無理だけど、次のライブで何か企画するか？」

「は？ 企画って」

「ジュエルビートルとセッションに決まってるやろ！」

「むしろ純と愛斗の二人だけとかはー？」

勝手に盛り上がる三人を見て、僕は溜め息をついてしまう。

「そんなことして何になるの？ 誰が喜ぶの？」

すると浩美がにやりとする。

「意外といるんだぜ、腐女子の子」

僕を見世物にするつもりか。

「みんなの前でキスとかしたら、絶対に盛り上がるで」

くくく、と愉快そうに笑う友一。

「ファン増えちゃったりしてね」

と、キオは何故かあり得ない期待を抱きはじめる。

「無い。つつーか、まだキスしてないんだからね」

思わずそう声に出して、僕ははっとした。三人はにやにやと僕を見ている。

「べ、別に、キスしたいとか、そういうわけじゃ」

「乙女だな、愛斗」

「よし、これからはマナちゃんって呼んでやるわ」

「良いなあ、ボクも恋したーい」

……これからは出来るだけ口を慎もう。そう心に誓う僕だった。

いちいちドキドキ

純が彼氏になってから、二カ月近くが経っていた。

その間に起きたいろいろな事柄が、僕をいつの間にか変えていた。

「愛斗、お洒落になったね」

「え？」

自室で出かける準備をしていた僕は顔を上げる。

「また彼に会うの？」

と、夜兄がにこにこしながら尋ねる。

「……う、うん」

その通りだった。今日はバイトの後に純と会う約束があった。

「どんな感じなの？」

夜兄の問いに、僕は答えを迷ってしまう。仲良くやってる、と言うのは変だろうか？

「まあまあだよ」

と、僕は返して部屋を出る。

「夕飯は？」

「食べてくるからいらない」

足早に玄関へ行き、靴を履く。

「そう。気を付けて行ってらっしゃい」

「うん、行ってきます」

背後の兄を見ることなく、僕は扉を開けた。

嘘が本物になりつつある今、僕は無意識に兄たちと距離を置くようになっていた。まさか、純に会うのが楽しみだなんて……言えない。

「最初のライブを入れると、デートするのはこれで四回目か」と、純は笑った。

ライブハウスで顔を合わせることもあるので、二週間に五回は純

と会っていることになる。一カ月だと十回くらいか。

「けっこう頻繁だね」

僕がそう返すと、純は笑った顔のまま言う。

「ま、だいたい夜だけだな」

そういえばそうだった。昼間の明るい時間に純と会ったことはほとんどない。

「……でも、もう二カ月になるんだよね」

独り言のつもりで呟く。すると純は少し遠くを見た。

「いつになったら、恋人以上になれるんだろな」

「……ごめん」

純が僕に対して今以上の関係を望んでいることは知っている。けれども、いざキスをしようとするのと拒否してしまうのだ。

「はは、謝ることねーよ。オレ、気長に待ってるからさ」

「うん」

彼女と付き合っている時は、別に覚悟なんて必要なかった。しいからキスをして、したいからセックスをしていた。けれども今は、何故だかそれが出来ないのだ。

「純は、男の人と付き合ったことあるの？」

「え？」

純が振り向き、「あー」と、考える様子を見せる。

「まあな。付き合ってたっつーか、中学ん時に襲われてさ」

と、笑い事のように言う。詳しく聞くのは怖いのでやめておくが、気になる発言だった。

「そ、そうなんだ」

「ちゃんと付き合っただのは高校ん時かな」

「女の子とは？」

「一応、何人かと付き合った。でも何か、しっくりこなくてすぐに別れたな」

どうやら、純は異性相手にやるだけのことはやったらしい。
「で？」

「ん、お前だよ」

と、純が僕を見る。

「初めて対バンした時から気になってた」
もう半年以上前じゃないか。

「で、ある時、お前の胸板見て、惚れた」

そう言っていたはずっぽく笑う。僕は呆れながら言葉を返した。
「なるほどね」

もしかすると、純と浩美が仲良くなったのも、僕に近づきたいからだったのかもしれない。浩美はあんな性格だから、きっとその様子を面白がっていたはずだ。

「よし、じゃあホテル行くか」

「は？」

突拍子もない発言に僕が目丸くすると、純が言う。

「嫌か？」

「うん」

素直に返せば、純が肩を落として見せる。

「残念だなあ。オレ、明日は午後からバイトで暇なのに」

「……知らないよ」

だいたいにして、ホテルってどこへ行くつもりだ。男二人で入れるのか？

「じゃあ、とりあえず」

と、純が立ち止まって僕を真っ直ぐに見つめた。

「ちよ、純、ここ歩道」

行きかう人たちの視線が気になる、と教えてやれば、純が「冗談に決まってるだろ」と、笑う。

「冗談がきつすぎるよ」

と、僕は溜め息をつく。

どちらにしても、キスする直前で僕が嫌がって失敗するはずだった。

けれども、純の想いを知っているだけに、僕にとっては何が本当

で何が冗談か分からない。いちいちドキドキしてしまうのが、自分でも嫌だった。

送られてきたメール

友一の管理しているホームページが恐ろしいことになりつつあった。

「問い合わせメールのほとんどがお前宛てや」

それは僕ら『ラテイ』の公式サイトなわけだが、アクセス数が半端じゃない。

それを証明するのが、送られてきたメールの数だ。

「この三日間だけでも二十通」

「……何で？」

「知らんわ」

と、友一はマウスを動かしてその内の一つを開ける。

「ジュエルビートルのジュンと付き合ってるって本当ですか？ そ

れと次のライブ、絶対に行きます！ やて」

友一はどこか呆れた口調でそう言った。

「何か、思ったよりも広がっちゃってる？」

「誰かがどこかの掲示板に書き込んだらしいで。それが地味に広がったうちう感じやな」

インターネットは恐ろしい、と、僕は思う。

「マイスぺの閲覧数も半端ないでー」

と、友一が僕を見た。

「……ご、ごめん」

まさかこんなことになるとは思ってもしなかった。けれども、よく考えると僕は彼氏を欲しがっていたわけではなく、そうしたのは浩美や友一たちであって。

「どうしたらいい？」

泣きそうな顔で僕が尋ねると、友一は笑った。

「別に良いやろ。俺らの知名度が上がるだけやし」

「で、でも」

「もしかすると、もつとでかい箱でライブ出来るようになるかもしれへんで？」

どうやら、友一は良い方向に捉えているらしい。バンドメンバーに同性愛者がいたら、いつかはバッシングやら何やら受けそうなものだが……。

「それに嘘ついてるわけでもなければ、俺らが公式でそう言ったわけでもないんやし」

と、友一は笑う。

「そ、そうだよな」

ファンの人たちからしたら、僕らしき人が純の彼氏だと言う声を聞いただけだ。仲間たちや周りの人が何と言おうと、僕はまだ何も発言していないのだから許される。

「最終的には、パフォーマンズでも良いんちゃう？ ま、お前があいつと付き合いたければそうすりゃ良いし」

「……う、うん」

噂を現実にしてしまっても、飽くまでも噂だったとしても、僕らに今注目が集まっているのは確かだ。

「とりあえず、このメールどうする？ 目通すか？」

友一が僕にも見やすいよう、横へずれる。

「うん、一応読むよ」

そう言っ僕は画面へ目を向けた。

キオの作ってきた詩は、相変わらず不思議な雰囲気を持っていた。韻を踏むのが好きなキオらしく、サビの言葉の並び方は軽快だ。

「で、これが曲だ」

と、浩美がテープを流す。

僕らの歌は、浩美の作曲したものをほとんどそのまま完成系へと持っていく。楽譜を見て、実際に演奏して、問題があったら直すくらいしか手を加えることはない。

「うん、やっぱり浩美はメロディメーカーだな」

曲が終わると、友一が最初にそう口を開いた。

「けど、ギターソロはもう少し派手でも良いんちゃう?」

「例えば?」

と、浩美。

友一はすぐにギターを構えると、即興で弾いて見せた。サビを踏まえつつ掻き鳴らす友一の音だ。

「何かちゃうな。でも、こんな感じが良い」

浩美は納得すると言った。

「分かった。じゃあソロは友一に任せる」

浩美の作ってきたものは設計図みたいなものだから、時には文句も入る。僕もちよつと引つかかるものがあつたが、実際に叩いてみれば分かることだと思つてやめた。

「次のライブのチケット、あるよな?」

朝兄に聞かれて、僕ははつとした。

「え?」

「だから、チケットだよ。今回もちゃんと金払うからな」

と、笑顔を向けてくる。

「あ、その……ごめんなさい」

僕が頭を下げると、朝兄が呆然とする。

「は?」

「あの、何か、今回はネット経由でチケットが完売しちゃって」

こんなことは初めてだった。

「嘘だろ?」

「いや、本当のことだよ。ちゃんと、兄さんたちの分は取っておくつもりだったんだけど」

「……そうか。やつと自分たちの力でチケットを売れるようになったわけか」

「え?」

朝兄の発言にびっくりした。確かにそうと言われればそうだけ

ども、何か違う。

「成長したな、偉いぞ」

と、朝兄が僕の頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

「あの、ちょ……」

僕が嫌がって逃げれば、朝兄は不満げにしながらもにこにこして言う。

「その調子で頑張るんだぞ、愛斗」

「あ、うん……」

どうやら兄さんたちは、僕と純の同性愛疑惑のことを知らないらしい。

そのおかげでチケットが売れたのだけれど、兄さんたちには言わないでおこう。ややこしくなる気がする。

僕に依存する彼の精神

純は言った。

『それなんだけどさ、クレーム、来たんだよな』

「え？」

『ホモのいるバンドなんて応援できない、って』

電話越しに響く彼の声は、いつもと違って落ち込んでいた。

「……そう、なんだ」

『愛斗の方は？ 何かなかったか？』

と、僕を心配する声。

「うん、こっちは平気。みんなも悪いことだとは思ってないみたいだし」

そう返せば、純が安堵の溜め息を漏らす。

『それなら良かった』

良くないよ。

「でも、純は？ 他のメンバー、どう思ってるの？」

『……分かんねえ』

遊びと本気は、全然違うからな。

そう言う声を聞いて、僕は何となく、彼が泣き出しそうな顔でいる気がした。

外で会うのはまずい。その為に僕は、純の暮らしているアパートへ来た。

「ちょっと散らかってるけど」

と、純が言う。

中へ足を踏み入れると、確かに部屋の中は散らかっていた。僕が一人暮らしをしたら、きっと同じようになるのだろうけど。

「つつーか、いいの？」

「何が？」

純が僕を窺うように見る。

「ここ、オレの部屋だぜ？ 隣の人がないし」

分かってた。僕だって、好きな女の子を部屋に呼んだことがある。もちろん、そこには下心というものがあつた。

「うん、知ってる」

純だってこんな密室に僕と二人きりでいたら、何かするにきまつてる。

「……そっか」

純は簡単に部屋の中を片づけると、僕へ言った。

「どうぞ座って」

「うん」

壁際に置かれた二本のエレキギターと一本のアコースティックギター。その隣にある棚には楽譜やCDがたくさん詰め込まれている。グラスを二つ取って戻ってきた純が、冷蔵庫から取り出したお茶を注ぐ。

「……」

「……」

気まづかった。外にいと嫌でも話題があるはずなのに、今日は何も浮かんでこない。

「……あの、さ」

と、口を開いたのは純だった。

「何？」

僕は彼の顔をちらりと見る。

「昨日、スタジオだったんだ」

語り始めた純の声に、耳を傾ける。

「うん」

「オレ、あんま調子よくなくて、そしたら……みんなと喧嘩になつて」

原因は聞かなくても分かっていた。

「噂になつてるのが嫌なんだって、言われた。すぐに別れる、そう

したら今まで通りやっていける」

「……うん」

別れるも何も、僕らはまだ本格的に付き合い始めたわけでもない
と、僕は思う。キスだってしてないし、セックスだってしてない。
ハグすらまだだ。

「オレは嫌だって言ったけど……」

と、純は僕を見た。

「やっぱり、別れるべきだったんじゃないかな、あの時」

純が本当のことを僕に告白してくれた時。

「追いかけたオレが、悪かった」

と、自嘲するように笑う。

「ごめんな、愛斗」

この前の電話の時も、きつと彼はこんな顔で笑っていたのだろう。
そう思っただけで、悲しくなった。

「噂のきっかけを作ったのは僕だよ。純は悪くない」

「……でも」

「だって僕は、少なくとも嫌だとは思わなかった。好きでいてくれ
たことは、素直に嬉しかったよ」

誰も知らない弱いところを見せてくれるのも、きつと僕にだけな
んだろ。それなら。

「良いじゃん、男の人を好きになっても。僕を、好きでいても」

きつと純は、今までにも似たような壁にぶち当たってきたはずだ。
それでも僕を好きになっちゃったのなら、受け入れるしかないじ
やないか。

「みんなは嫌かもしれないけど、そう簡単に諦められるの？」

純が首を横に振る。けれども彼は、泣きそうな声で言った。

「でも、一度でいい。愛斗とキスできれば、それで諦める」

シヨックだった。惚れさせるつもりだと強気に言ったのは、嘘だ
ったのか？

「……僕は、きつとそれじゃ、嫌だよ」

無意識に出た言葉が、純の顔を上げさせる。

「でも、愛斗」

「だって僕は、もっと純のことが知りたいもん」
お互いにはっとする。

「……冗談、やめろよ」

「……じよ、冗談のつもりじゃなくて、でも、その」

きつと僕は、もう戻れない。純が本当は弱い人だってこと、知ってしまったから。

「オレで、いいのか？」

「う、うん」

潤んだ目のまま、僕をじっと見つめる純。

静かに伸ばされる手が、僕の顎を取る。身体全体がドキドキして、僕はぎゅっと目を閉じた。

重なるだけのキスだった。

あつという間に離れてしまった彼を、惜しいと思う。

「……これ、だけ？」

「は？」

「え、あの、も、もつとこう……」

ちゃんとしたキスがしたい、と言うのが恥ずかしくて僕は口を閉じてしまう。男相手に期待する恥ずかしい自分と、純相手に高揚する自分が戦っていた。

「……しても、いいの？ 後悔しない？」

と、純は言う。僕は頷くこともせず、ただ彼の目を見つめた。

先ほどよりも近くに寄って、また唇を重ねる。口から、舌から、僕の中を侵食していく。

自然に伸びた腕は互いの身体を触り、不思議なほどにその今が心地良かった。

別れ際、純は笑っていた。

「じゃあ、またな」

僕も手を振って応える。

「うん、また」

改札を抜け、ふと振り返る。

純はまだ、僕に向けて微笑んでいた。

依存、という言葉が、きつと僕らにはお似合いだ。好きだとか、惚れたとか、そんなことじゃなくて、僕は僕に依存する彼の精神を、ただ愛しいと思った。

僕に依存する彼の精神（後書き）

これは純愛なのか、愛純なのか。ご想像にお任せします。

夢への道

季節はあつという間に過ぎ去る。暑い夏は、いつの間にか涼しい秋になっていた。

僕らの知名度は上がり、今のライブハウスでライブをすることすら怪しくなってきた。

「もっとでかい箱でも歌えるって言われたんだが」

と、浩美が溜め息まじりに言う。

「行けると思うか？」

沈黙を破ったのはキオだった。

「うん。行けると思う」

と、につこり笑う。いつもと変わらない様子で笑う彼は、こういう時にはとても頼もしく見える。

「ってゆーか、行っちゃおうよ？　ボくら、これでもメジャー目指してるんでしょ？」

「ああ、そうだな」

僕は何と言えいいのか分からなかった。僕の隣にいる友一もまた、俯いていた。

「ボクは、行ける所まで行きたい。せめてキャパ千人超える箱でやりたい」

と、キオは真剣に目を輝かせる。

そうだ、今は二百人程度のライブハウスでしかない。でも最近僕たちを見に訪れる客が多いのだから、もっと上まで行けるはずだ。

「うん、僕も賛成だ。やれるところまでやってみよう」

顔を上げて発言すれば、キオが嬉しそうに頷く。

「……そうやな、やるだけやってみるか！」

と、友一も言った。

浩美はすると、どこか儀式的に言った。

「じゃあ決まりだな。俺たちはウェンズ・レーベルに所属する」

何も知らされていなかった僕たちは、一様に目を丸くする。ウェンズ・レーベルといったら、インディーズでも有名なレーベルじゃないか！

「え？」

と、首を傾げるキオ。

「俺たちに興味を持ってくれた人がいて、それでレーベルに付いてないなら所属しないか、って」

「嘘やろ！？ 何でそんな、俺たち全然やのに！」

叫ぶ友一を宥めつつ、僕は言う。

「それは、信じてもいいの？ 本当にそこでやっていけるの？」

「ああ、大丈夫だろう。ただ、売りがな」

と、浩美が苦い顔をする。

「ドラムの愛斗を中心にしろって言われたんだ」

「……え？」

聞き返すと、浩美が溜め息をつく。

「ただの噂だっけ言ったら、それでも良いからキャラ作ってやれとのことだ」

キオと友一が口を閉じた。

「……マジで？」

「ああ」

「そっか……」

溜め息したくなっただけこらえる。一体僕らの何が良かったのか、全く分らない。

「滅多にないチャンスだ。でも、今のままでいられるとは限らない」
申し訳なくなった。僕のせいでこんなことになって ても、やつぱりこれはチャンスでもある。

「やるか？」

「うん、やろっ」

と、キオがまた頼もしい言葉をかける。

「別に愛斗中心でも良いじゃん。ボク、注目されるのってあんまり

好きじゃなかったしさ」

外見とは裏腹にすっかりしている。

「せやな、やってやるうやないの！ これも愛斗のおかげや！」

と、友一も笑う。

僕は一人、嫌なくすぐったさを胸に感じていた。

「……うん、ありがとう」

他の人たちよりも一足早く、僕らは一歩先へ歩み出す。それが良いことなのかどうかは、今はまだ分からない。

ウエンズ・レコードは話に聞いたよりも良い会社だった。

彼らは僕ら『ラティ』を注目の新人バンドとして売り出してくれることを約束してくれた。代わりに、僕が表向きのリーダーとなる。

「じゃあ、これから忙しくなるの？」

と、夜兄が問う。

「よく分かんないけど、たぶんそうなると思う」

来月のライブでレベルに所属して初のお披露目となる。

「給料は？」

と、尋ねる朝兄へ僕は言う。

「分かんない」

まだ始まったばかりだし、きちんとしたレベルに所属するのは人生で初めてのことだ。

「そう。良かったね、愛斗」

「うん」

「ま、後はお前らがどこまで頑張れるか、だな」

「うん、分かつてる」

何だか、兄さんたちのおかげで夢への道を近道してしまったようだ。

「純くんはどうなの？」

と、夜兄。僕は少し俯いて答えを返した。

「それが……僕らとは反対に、解散するかもって」

二人がびつくりして目を丸くする。

「何だよ？」

「何かあったの？」

僕は頷くだけにした。

「うん。詳しいことは聞いてないから」

兄さんたちのせいで、夢への道を遠回りせざるを得なくなったのだ。けれども、そんなこと二人に言えるはずもなかった。

そんな兄さんたち

「ヴォーカルのキオと、ギターのゆーいち、ベースのひろ美で、ドラムのマナト」

純がぽつりと呟く。

「ツインギターにする気、ないよなあ」

「……ごめん」

僕はそう言って俯いた。

「気にするなよ。オレは大丈夫だから」

と、純は笑ってくれたが、きつと心の奥では笑えていないだろう。

「でも、さ」

僕はこれからのことを考えながら、純へ言う。

「彼氏がいるって言っても、僕の場合は何か違う気がするんだよね」

「違うって？」

「だから、純のことは確かに好きだと思うけど、男性に興味あるわけじゃなくてさ」

純が僕の肩を抱き寄せる。

「お前、気づくの遅いな。男だから好きなんて、不純すぎるだろ」

と、いたずらっぽく微笑む。

「……そ、そうかな」

「そうだよ。オレだって、お前以外の男に興味ねえもん」

そういえば、女の子だから好きになる、なんてことはなかった。

その人が好きだから、好きになるんだ。

そのことに気が付くと、何だか胸がちくちくとくすぐったくなる。

「うん、そうだね」

そう僕は答えて、顔を上げる。

純の後頭部に手をやって、そつと頬に口づけた。

「ごめんね」

彼は目を丸くしていたが、にっこり笑うと僕の身体を引き寄せる。

「オレの分まで頑張れよ」

「……うん」

ぎゅっと身体を抱きしめあう。僕の頭から不安や怯えなどの余計な事が、すつと消えて行く。

「……愛斗、愛してる」

「うん」

これまでちゃんとしたマネージャーはいなかった。営業だって四人でやってたし、CDも全て自費で作っていた。言ってしまうえば、現代に似つかわしくない地道な活動をしていたわけだ。

それが、突然こんなことになった。

「マネージャーの小野と申します。よろしくお願いします」

にかつと笑う爽やかな青年。どう見ても僕たちよりも年上で、三十歳前くらいに見える。

それぞれ戸惑いながらも、よろしくお願いしますと頭を下げる。事務所に所属するだけでこんなに違うものなのか。

「早速なんだけど、来週、写真撮るから」

「写真？」

浩美が聞き返すと、小野さんは人の好い笑顔のまま答える。

「フライヤーの写真だよ。一応こんな感じで」

と、その詳細の書かれた紙を僕らへ見せてくれた。

「今回は時間ないから、衣装は勝手に決めさせてもらったよ。当日は現地集合ね」

キオが小さく「うわぁ」と、声を上げた。そこに書かれていたのは、僕らに関するイメージだった。キオは童顔なので少年のイメージ、用意される衣装は原色を使ったパーカーに膝丈のズボン、ということだ。

「……あのー」

友一が小野さんへ声をかける。

「これって、マジですか？」

どうやら動揺しているらしく、友一の言葉には関西弁も訛りもない。

「もう決定してることだよ。何か問題でも？」

「いや……そのー」

再び紙面に目を向けて、友一は言う。

「俺のキャラ忘れてません？ こう見えても、関西出身なんですけど」

友一のイメージは中間、衣装も緑をテーマにありがちなものを用意してくれるそう。

「え、そうだっけ？ まあ、これからいくらでも変えていけるから安心して」

と、小野さんは笑う。

友一はどちらかというと、親しみやすい関西人を自称している。

中間、というのはつまり普通なわけで、それが友一は嫌なのだ。

「はあ……」

しかし人見知りなせいもあるのか、上手く意見を主張できずに終わる友一。

僕のイメージは男前、と書かれていた。衣装も黒のワイシャツにダメージジーンズと、男らしさを強調されている気がする。

ちなみに浩美のイメージは、マナトの対だった。衣装も白でまとめるらしく、僕が男前なら浩美は美青年、ということらしい。

何か間違えているような気もしたが、とりあえず流れに任せてみよう。

「へえ、マネージャー付いたんだ。すごいね」

と、夜兄は言いながら茶碗にごはんをよそる。

「活動が本格的になったら、機材も揃えた方が良さってさ」

「じゃあ、お前もドラム買うのか？」

と、座っている朝兄が僕を見る。

「お金が貯まらないと買えないから、しばらくは無理だよ」

僕はそう言って言葉を続けた。

「だから、しばらくは今のままかな」

自分専用のドラムセットなんて、こつこつ貯金しなけりや買えた物ではない。ギターやベースなら十万もあれば中古で良い物が手に入るかもしれないけど、僕の場合はそうはいかない。

「だよな。まあ、スネアくらいなら買ってやつても良いぞ」

「え？」

「そうだね。誕生日プレゼントということだ」

と、自分の分までよそい終えた夜兄が席へ着く。

「な」

「ね」

意見が合ったのか、にこにこ顔を合わせる兄さんたち。僕はそんなことさせられないと思い、慌てて口を開いた。

「いいよ、別にそんなことしなくて。スネアだって安くないんだから」

どんなに安くても三万はする。良い物になると、その何倍もあるのが普通だ。そう簡単には買えない代物である。

「遠慮するなって」

「それとも、新しいペダルにする？」

「いや、あの、そういうことじゃなくて……えっと」

乗り気になった兄さんたちを止めるのは、とても難しい。ましてや僕の為だと言われると、弱い。

「その、今の環境で、どこまでやれるか試したいんだ」

思ってもないことが口をついて出た。本心では、ちゃんと環境を整えたいのだけれど。

「今まで通りにやってみて、駄目ならその時に考えようと思ってて」と、僕は二人を見る。

すると、兄さんたちは納得した様子で頷いた。

「そうか。愛斗がそう言うなら仕方ないな」

「今が、自分の実力を知る良い機会だもんね」

一応は分かってくれたようだ。僕は安心して息をつく。

兄さんたちは、僕が冗談でもドラムセットが欲しい、なんて言ったら、本気で買ってくれちゃうような人たちだ。どんな難題でも、僕の為なら金も時間も惜しまない。

「愛斗は結構ストレス溜めやすいからな、無理するんじゃないぞ」

「何かあったら俺がいつでも話は聞くなり、相談にも乗るからね」

そんな兄さんたちのことは嫌いじゃないけれど、過保護過ぎて嫌なのが僕の心情だった。

いつになったら、弟離れしてくれるのだろうか？

何気ない瞬間

前面に出るキオ。後ろに並んだ三人。その中心は僕。

「……」

純が見たいとうるさかったので、出来上がったばかりのフライヤーを一部だけもらって来たのだが、純は何も言わずに写真を見つめていた。

「……変だよね」

僕がそう言つと、純はぱっとこちらを振り返る。

「あー、何ていうか……すげーかっこいい、お前が」
「は？」

呆れてフライヤーを返してもらおうとしたら、純が避けた。

「もらっちゃダメ？」

僕の目を見つめる視線に負けそうになるが、僕は言う。

「まだ兄さんたちに見せてないからダメ。あの二人がうるさいの、知ってるでしょ？」

「……そうか」

純はどこか名残惜しそうに二次元の僕を見つめる。

「っていうか、いろいろおかしいんだよ」

もう一度手を差し出し、今度こそ返してもらつ。

「どこが？」

「キオはかわいこぶってるし、浩美なんてメイクしてるし、友一はかっこつけてるし」

「でも、お前似合ってるよ」

と、純。

「お世辞言われても嬉しくないよ」

そう言いながら、フライヤーを鞆へとしまつ。

「マジなのに」

と、純が顔を近づけ、僕をじっと見つめる。あまりにも近いので後ずさるうと、床へ両手をつく。

「愛斗は変わったと思う。初めて会った時よりも、すげーかっこよくなってる」

半ば僕の上に乗った状態で、純がにこつと笑う。

「そ、そんなことないよ」

思わず目を逸らすと、完全に押し倒された。

「何でお前は、いつも無自覚なんだろうな。ちょっとは自信持っても良いのに」

と、僕を見下ろす。

「べ、別に僕は……」

確かに兄さんたちは背も高いしかっこいい。けど、僕は違う。

「まあ、そんなお前が好きなんだけどさ」

と、純が唇を重ねてくる。

言い返したい言葉を頭の中に並べながら、それとは別の場所で考える。誰が何と言おうと、僕は今のままの僕で良い。

「……でも、純がそう言うなら認めるよ」

僕が結論を言葉にすると、純が隣に寝転んだ。

「つつーかさ、お前は今まで何人の子と付き合ってきたの？」

「え？」

具体的な数字を求められ、僕は高校時代にまでさかのぼる。

「五人、くらいかな」

「十分だが」

と、純が笑う。

「お前、モテモテじゃん」

「え、そうかなあ？」

思春期だから告白されて付き合ったり、こっちから告白して付き合ったりした。専門学校でもいくつか出会いはあったわけだし。

「でも、浩美なんて二年間に十人の子から告白されたんだよ」

「あいつはでも、付き合ってはないだろ？」

「あー、そういえばそうだった。変なところ真面目なんだよね」

と、僕は笑う。自分が好きな相手じゃなければ、浩美は告白されても断ってしまうのだ。もったいない、と友一がよく言っている。

「あれ、じゃあ純は？」

「ん、前にちらつと言ったと思うけど、オレは女子二人に男子一人だけ」

意外だった。純の方が、もっと経験あるような気がしていたから。
「その女子つてのもさ、一人はほとんど勢いで付き合っただけで、一週間で終わったよ」

と、純。

僕は適当に相づちを打ちながら、純の方へ寝返りを打つ。

「じゃあ、僕は四人目の恋人なんだね」

「オレは六人目だな」

言って、二人くすくすと笑う。

「愛斗」

純が僕の頬に手を伸ばし、優しく髪を撫でる。

そんな、何気ない瞬間を噛みしめていた僕だったが、ふと純の手を取った。

純が何かを待つような顔をして、僕はその手を放すと、純の上に覆い被さる。

さつきとは反対の体勢になり、今度は僕の方からキスを贈る。

「……愛斗」

純が切ない表情で僕を見上げていた。

もう一度舌を絡ませ、お互いの身体が求め合うのを確かめる。

事務所の所有しているスタジオは綺麗なところだった。

別の場所にはレコーディングスタジオもあるらしく、それは言うなれば僕らの知らない世界だった。

キ才はどうやら、ラティの顔としての責任を感じ始めたのか、以前よりもキャラが固まっているようだし、浩美も以前に増してきり

っとしていた。友一なんて、早くも私服に気を遣い始めている。
「ライブまでもう一ヶ月切ったからね、頑張ってもらわないと」
と、小野さんは言う。

ぎこちなく中へ入り、僕らはやはりよそよそしく準備を始めた。
音楽レーベルなんていくらでも、どこにでもある。しかし、その
元となる会社の規模が違うだけで、その差は広がる。

「……」

備え付けられたドラムセットは新品のようにキラキラしていた。
他のミュージシャンたちも、このドラムを叩いているのだと思うと
わくわくする。

見ると、浩美がアンプに目を奪われていた。友一はうきうきとギ
ターにケーブルを繋いでいる。キオはスタンドマイクの位置を調整
しているところだった。

今はまだ不慣れだけれど、僕らはその内にこのスタジオに慣れて
きて、事務所の雰囲気にも慣れてきて、マネージャーの小野さんと
の仲も深まるのだろう。

準備を終えたキオが室内をうろろし始め、僕は早くドラムを叩
きたい衝動を押さえながら、ペダルを置く。

胸がドキドキしていた。

ライブまでまだ時間はあるけれども、それまでに僕らはあと二回、
このスタジオで練習をする予定だ。そしてライブの時に売り出すミ
ニアルバムのレコーディングをする。

これから先のことに思いを馳せる。そしてふと、気がつく。

純は、どうしているだろうか？

あまりバンドのことを話してくれないだけに、彼らの状況を僕は
知らない。解散するにしても、いつが最後のライブになるのか、僕
は知らない。

ギターのチューニングの音がする。もう一方では、ベースの音。
中心に立ったキオの背中を見つめ、僕は呼吸を一つする。

次に会った時、純にはつきり聞かせてもらおう。僕らの状況

ではなくて、彼らの^{いま}状況を。

繋いだ手

週に三日しか、コンビニのバイトが出来なくなった。給料は半分近く下がるのに、音楽活動にかかる費用が思ったよりもかかるので、金欠になるのが目に見えていた。

「ライブの後は、本気で忙しくなるかも」と、僕は純へ言う。

「週に一度会えるようにしたいとは思っけど」

寂しいのか、純の手がそっと僕の手を重ねられる。

「無理じゃなくて良いよ」

と、純。

「……純、聞いても良い？」

「うん」

「ジュエルビートルはどうなったの？」

まっすぐ彼の目を見つめると、純は目を逸らした。僕は純の手をしっかりと握る。

「本当に解散しちゃったの？」

純は答えに迷っている様子だった。

あまりしつこく聞くのも良くないと思い、僕は口を閉じて待つ。

「……もう、終わった」

「いつ？」

「……一昨日の、ライブで」

純は優しい人だから、きっと僕に迷惑をかけまいとして何も言わなかったのだらう。そんな気がしていたんだ。

「そっか」

「うん」

繋いだ手を、そっと恋人繋ぎに変える。

「ごめんね、純」

何もしてやらなかった。責任は僕にもあるはずなのに。

「うん、謝るのはオレの方だ。本当に、ごめん」

と、純が手に力を入れる。

俯いて顔を上げない彼を、じっと見つめる。好きだとか、愛してるとか、そんな言葉では力不足だった。

だから僕は会話を続けた。

「まだ音楽は続けるの？」

「どうだろ、分かんねえや」

いつもの口調で言う純。

「そういえば、純のギター、ちゃんと聞いたことなかったなあ」

「……」

純が顔を上げて僕を見た。

「聞かせて」

と、僕はにこつと笑う。普段は恥ずかしくて、自分から笑うことってほとんどないのだけれど、純が笑ってくれるなら嫌じゃない。

「……うん」

純は立ち上がると、スタンドに立てたギターの前へ行く。普段から使っているエレキギターを取ろうとして、その隣のアコースティックギターに選び直す。

「アコギでも良い？」

「うん」

そして僕から少し離れたベッドに腰を下ろし、ギターを構える。

「オレ、弾き語りできるんだぜ」

と、純が笑う。そして、純は弦を弾き始めた。

聞こえてきたのは、数年前に流行したバラードだった。僕らにとっては青春の思い出ソングともいえる名曲だ。

歌い出した声は、真っ直ぐで綺麗だった。

事務所でライブに関する打ち合わせがあった。その帰りの電車の中で、浩美が僕へ言う。

「あいつとはどうなってるんだ？」

「え？」

「もう三ヶ月経っただろ？」

はっと気がつく。そういえば、ここ最近は忙しくてそんなこと考えもしなかった。というより、もう三ヶ月以上経っている。

「あ、ああ、うん」

僕がどう答えようか迷っていると、浩美が溜め息をつく。

「まだ続いてるみたいだな」

見破られた。

「うん……」

電車が駅について、束の間の静寂が訪れる。

「飽くまでもキャラだって言ってるから、お前もそれを貫いた方が
良い」

「うん、そうだね」

「……何かあったらすぐに相談しろよ」

電車の扉が閉まり、また動き出す。ガタンゴトンとうるさい車内で、僕は呟く。

「ありがとう」

浩美が少し、笑った気がした。

ライブまであと五日。

ドラムの個人練習も重ねて、僕は少しでもいい音を叩けるようになろうと思っていた。

これから活動の拠点となる地域では、僕らなんてほとんど無名同然だ。

応援してくれるファンが一人でも多くついてくれるよう、頑張らなくてはならない。

……上手くいけば、メジャーだって夢じゃないのだから。

「愛斗、これやるよ」

と、通勤前の朝兄が差し出したのは二千円だった。

「え、兄さん？」

受け取れない、と拒否すると、兄さんはそれを僕へ押しつけてくる。

「金、ないんだろ。月夜の分と合わせて二千円だ」

朝食の片付けをしていた夜兄が、僕へ向けてにこつと笑う。

「……あ、ありがとう」

確かに交通費はぎりぎりだったし、昼食を抜けば余裕になる額しか持っていなかった。まあ、小野さんはいい人だから、頼めば少しくらい貸してくれそうな気もしていたのだけれど。

「じゃあ、行ってくるな」

と、僕の頭をくしゃっと撫でて、玄関へ向かっていく朝兄。

「行つてらっしゃい」

僕もそろそろ、スタジオへ行く時間だった。ライブ前の最後の合わせなので、今日はちょっと時間がかかるのだ。

自室へ鞆を取りに行き、中身を確認してから戻る。

「愛斗もそろそろ時間？ 気をつけてね」

と、夜兄。

「うん。ありがとう」

テーブルに置かれたままの千円札を二枚、財布へとしまう。

「じゃあ、行ってくるね。帰り、遅くなるかもしれないから」

「うん、行つてらっしゃーい」

夜兄の言葉を背中に、僕も家を出た。

ポジティブな助言

「……笑っちゃダメ、ですか」

「そう。マナト君にはクールに演奏しててもらいたいんだ」
スタジオ練習での休憩中、小野さんが突然僕へそう言った。

「く、クール？」
分からない。

「楽しそうにドラムを叩くのは良いけど、それだと可愛いんだよね」
「はあ」

「この前の撮影の時みたいに、かつこいい方が良いんだよ」
と、小野さんはにこにこ笑う。

「かつこいい、ですか」

何だか最近、その言葉をよく耳にする気がする。

「でも、クールってどんな感じに？」

僕が尋ねると、小野さんは言った。

「だから、笑わなければ良いんだよ。見てる子は本当によく見てるからさ」

よろしく、と、小野さんは次に友一の方へ向かう。

ドラムを叩くのは、確かに楽しい。好きだし、身体全体で音を生み出す感じがしてテンションが上がる。

けれども、それがいけないなんて……。

「はあ」

思わず溜め息をつく、キオが僕の隣へ座ってきた。

「何か言われた？」

「……うん。クールに演奏しろってさ」

「そっかあ。ボクはむしろ、もっと動きが欲しいって言われたよ」

前向きになれない僕と違って、キオはいつもと変わらない様子だ。
「今まで、あんまり指摘してくれる人っていなかったから、ありが

たいよね」

「そう？　僕なんて、笑うなって言われたんだよ？」

と、僕はまた溜め息をつく。

「じゃあ笑わなければ良いじゃん」

「……キオ」

彼の思考回路は羨ましい。単純だし、ポジティブだし、溜め息をつく隙がない。

「楽しそうにドラムを叩く人って、素敵だけどさ」

と、キオが前を見た。

「愛斗の場合は、笑ってると、ちよつとアホっぽいんだよね」

壁一面の大きな鏡。そこに映る僕らは、客観的だ。

「たぶん小野さんは、マナトのイメージを固定するために言ってくれたんだと思うな」

鏡に映る僕とキオ。小柄なキオと違って、僕は普通の男だ。

「あと、MCもボクか愛斗がやるらしいね」

キオは、そう言って笑った。

「頑張ろうね」

「……うん」

でも、本当の自分を出せないのはとても辛い。見てくれる人たちを騙すわけだし、僕はうしろめたくなる。

キオはきつと、今だけの辛抱だからとポジティブな助言をしてくれるのだろう。先が見えたから、僕は尋ねてみる。

「僕って、どんな風に見えてるの？」

「んー」

上から下まで僕を眺め、キオは答える。

「外見だけしっかりしてて、中身は色んな意味で臆病な男の子」

キオは見事に言い当てた。薄々知っていたことを、改めてはつきりと指摘してくれた。

「……しっかり、って？」

「だから、クールなんだよ。昔はそうでもなかったけど、最近すこ

くイケメン」

「最近？」

「たぶんだけどね」

鏡の中の自分と目を合わせれば、どこか別人を見つめているような気分になる。

「何だろ、垢抜けたって言うのかな？」

「垢抜けた……？」

「うーん、浩美に聞いたら分かりそうな気もするんだけど、何かそんな感じ」

と、キオはごまかすように笑った。

「僕って、何か変わったかな？」

深夜番組が盛り上がりつつある時間に、僕は純へそう尋ねた。

『何だよ、急に。変わったって言うても、どんな風に？』

「それが分からないんだよ。キオには、最近すごくイケメンって言われたけど、意味分かんないし」

すると、純は少し間を置いてから言った。

『前にも言ったと思うけどさ、お前は自覚がなさすぎるんだよ』

「え？」

『お前、褒められても心の中では否定するだろ？』

「……う、そうかも」

『なのに、人の好意は絶対に無駄にしないから、流されてる』

「……うん」

『認めようぜ、そろそろ』

「何を？」

『自分が兄貴たちよりもイケてるってこと』

はあ！？ と、叫びたいのをこらえる。

「っ、そんなことないよ」

『あるんだよ。お前は無表情で何も喋らない方が確実にモテる』
意味が分からない。

『そんなお前が優しくしたり、たまににこって笑うから、さらにモテる』

「も、モテてなんか」

『それと、ついでだから言うけど』

と、純がまた間を置く。

『オレのことさ、本気じゃないなら振ってくれて良いんだぜ？』
返す言葉が浮かばなかった。

本気じゃないなんて、いつ僕が言った？ それとも。

「僕のこと、嫌いになった？」

『いや、好きだよ。好きだから、その……』

僕だって、純を守りたいって思っている。簡単に手放してはいけない人だって、分かっている。

『オレよりも好きな人がいるなら、それで良いから』

「っ、僕は純と離れたくなんかないよ。離したくない」

『愛斗』

「僕は、僕は……」

言わなきゃいけない言葉があるはずなのに、なぜか声にならない。
やがて純は、静かに言った。

『それでも、オレはお前が幸せでいてくれるなら、それだけでいいから』

波に乗った僕たち

純からの連絡が途絶えた。メールをしても、電話をしても、反応がない。

「緊張してるの？」

楽屋からステージへ向かう途中、小野さんが僕へ声をかけた。僕はただ「はい」と、頷いただけで、頭の中では別のことしか考えられないでいた。

純の家へ行けばいいのだろうが、生憎と僕の予定は空いていなかった。今日のライブ次第では、さらに会いに行く時間など無くなってしまうだろう。

あまりにも、純のことを想い過ぎていた。

「こちら、ギターのゆういちです」

MCを務めるキオが上手を差す。

「で、ベースのひろ美」

くるりと後ろを振り返り、僕を差す。

「ドラムス、リーダーのマナトです」

僕は重たい気分のまま、彼らへ軽く頭を下げる。

「で、ヴォーカルのキオです」

自己紹介が終わり、簡単なトークをする仲間たちを、僕はただ冷めた目で見ていた。

音は、すでに身体が覚えている。

楽屋に戻ってから、僕は笑えなかった。

「何か他に、問題がありそうだな」

浩美の指摘に頷きを返す。

「うん」

「何があつた？」

携帯電話を取り出して、僕は言う。

「純と、連絡が付かないんだ。時間がないから、会いに行くこともできなくて」

無意識に溜め息がこぼれる。

「……今日、兄貴たち来てたよな」

「え、うん」

「こっちには来ないのか？」

「……分かんない」

「来るなら、それと一緒に帰ればいい」

「え？」

僕が顔を上げると、浩美は真面目な顔で言う。

「打ち上げなんて無視して、会いに行けって言ってるんだ」

「……でも」

携帯電話に目を落とすと、楽屋の扉が開いた。

「よう、お疲れー」

「みんな、お疲れ様」

朝兄と夜兄だった。小野さんに話はしていたから、通してもらえたのだろう。

「おう、お久しぶりっすー」

と、友一が頭を下げ、キオも「お疲れ様ですー」と、笑う。

僕の方へ来る兄たちへ、浩美は言った。

「悪いんですけど、こいつ連れて帰ってもらえませんか？　なんか、熱があるみたいで」

なんて突拍子のない。

「本当か？　それは大変だ」

「慣れない舞台で疲れちゃった？」

朝兄と夜兄が、同時に僕の額を触ろうとする。それを避けて、僕は言った。

「その、熱ってほどじゃないから」

「マネージャーには俺から話しておきます」

と、浩美。

朝兄が僕を椅子から立たせ、夜兄が僕の荷物を手に取る。

「悪いな、いつも弟が迷惑かけて」

「それじゃあ、後のことは任せたよ」

そして、僕らが楽屋を出ようとして、入ってきた小野さんと鉢合
わせする。

「今日はお世話になりました」

「これからよろしくお願いします」

と、兄さんたちに促されて外へ出る僕。状況を理解していない小
野さんには、すぐに浩美が声をかけていたので大丈夫だと思うが
どうしたことが。

考えに考えて、僕は兄さんたちへ言う。

「本当は、純と連絡が付かなくて、それがストレスになっちゃった
みたいなんだ」

朝兄は言う。

「何だつて？ どうしてずっと黙ってたんだよ」

夜兄は言う。

「喧嘩でもしたの？ それとも、急に？」

「急に、あっちから」

俯いて、電車の到着を知らせるアナウンスを聞く。

「今から、会いに行っても良い？」

兄さんたちは悩むことなく、僕の頭をくしゃつと撫でた。

「ああ、行きたければ行って来い」

「心配だもんね。気を付けて」

僕は頷くと、反対側のホームへ向かう。ちょうど、電車が到着し
た。

「……」

夜も遅かったからか、純は家にいてくれた。けれども、僕を見て言葉を失う。

「どうして、電話に出てくれなかったの？」

僕の問いに、純が唇を噛む。涙をこらえるような、そんな風に。

「心配したんだよ」

純が、言う。

「……ごめん。オレ、愛斗を試してた」

そして僕から視線を逸らす。いつ、背を向けられてもおかしくなかった。

「どうして？」

「やっぱオレたち、別れよう」

答えになっていない。

急に、何言い出すんだよ」

純の考えが読めない。僕が半歩踏み出すと、純が半歩下がる。

「だって、オレがいたら愛斗は……」

「僕が、何？」

ふつふつと怒りのようなものがこみ上げてくるのを感じていた。

この感覚は久しぶりだ。

「オレ……嫉妬、してるんだ」

「嫉妬？ 誰に？」

「……だってお前、きっと成功するだろ？」

と、純が寂しげな目で僕を見た。

「え？」

「音楽で成功して、きっと、遠くに行っちゃうんだろ？」

純は僕に嫉妬していた。波に乗った僕たちを。

怒りがふつと冷静になって、僕は言う。

「そんなこと、まだ決まっ」

「決まってるよ！」

突然、純が声を荒げた。僕はびくつとしたが、どうにかこの状況を変えたくて距離を詰める。

「浩美から全部聞いたんだ。オレは、そんなお前のそばにいるの、耐えられない」

「純」

「愛斗のことは、大好きだ。でも、一緒にいたくないよ……」
矛盾していた。

けれども、僕にとってもそれは夢だった。仲間たちと共に追いかけると決めた、大切な夢だ。

「だから愛斗……もう、やめよう」

「……嫌だ」

今にも泣き出しそうな彼を、強い力で抱き寄せる。

「っ、愛斗……」

「僕はどっちも手放せない。純が嫌でも、僕はまだ純といたい」
純の震える手が、僕の背中を掴む。

「純は嫌かもしれないし、僕を憎く思うかもしれない。でもね、純」
「……」

「もっと僕に甘えて良いんだよ。頼ってくれて良いんだよ。もっと、僕に依存してよ」

「……そうしたら、離れるのが怖くなる」

「離れないよ」

「い、依存したら……愛斗の、重荷になる」

「良いんだよ、それで」

純が溜め息をついて、涙を流し始める。ぎゅっと僕を抱きしめて
「愛してる」と、ささやく。

「愛してる、愛斗。でもオレ……これから、どうしたらいい？」

「……考えよう、二人で」

僕が成功して純が傷つくなら、どうしたら傷つかないで済むのか、その方法を探すだけだ。

人生を左右する駆け引き

綺麗だとか純粹だとか、そんな言葉とはほど遠い。

「だって、ドラムがサポートっていうバンドも多いでしょ?」

「で、でも、そんなのダメだ」

「……だよ」

二人同時に溜め息をつく。

「ごめん、愛斗」

純が呟く。僕は肯定も否定もせず、ただ考える。

「本当にオレ、矛盾してるよな」

「……誰だって、似たようなものだよ」

矛盾するのは生きていく上で仕方のないことだ。

「やっぱりさ、僕たちが成功しなければ良いんじゃないかな。細々と、地味に」

「……」

純が僕の目を見る。

「何?」

「……いや、成功しないようにするのって簡単じゃないと思っただけ」

そうだ。成功するかしないかなんて、僕たち自身が決められることじゃない。ファンは勝手についてくるものだ。

「……どうしようか」

「オレ、やっぱり頑張るよ」

すっかり気分も落ち着いた様子で純が言う。

「またメンバー見つけて、もう一度頑張ってみる」

「……無理しないでね」

「うん」

ネガティブな思考は捨てるしか解決法はない。何事もポジティブ

に考えなければ、いつまでも真っ暗なまま。

「……また、負けそうになったら」

と、僕を見る。僕は頷いた。

「うん、ちゃんとそばにいるよ」

まるでゲーム。人生を左右する駆け引き。決して互いに影響を与えない駆け引き。

「ありがとう、愛斗」

互いの温もりだけが僕らの心を穏やかにする。きっとこれは、ただの汚れた慰め合い……。

ミニアルバムの売れ行きは好調だった。

「思ったよりも売れたんで、社長も喜んでるよ」と、小野さんは言う。

「これからいくつかライブが続くけど、それが終わったらシングル出すからね」

僕たちがそれぞれに返事をする、小野さんが僕を見て言う。

「マナト君も、この前のすごく良かったよ。クールだった」

「え、あ、はい」

クール、と言われて戸惑う。

この前は、純のことしか頭になかったから楽しんで演奏が出来なかったただけなのだけれど。

「これから、あんな感じで頼むよ」

僕は愛想笑いを返す。練習に練習を重ねたから身体が覚えていただけであって、あの状態で慣れない曲をやったら確実に間違える。

そんな僕の思いも知らず、小野さんは上機嫌。

「じゃ、今日はみんなに夕飯、ごちそうしちゃおうかな」

「え、マジですか？」

「やった！ 小野さん、ナイス！」

「さすが、大人の男やな！」

盛り上がる三人を、僕はどこか微笑ましく思った。

でも、キオの思考を借りるなら、僕は純のことを考えながら演奏すればいい。演奏に集中しなければ、僕はクールなのだ。

クール、という言葉は未だに僕の中ではぴたりとはまらないわけだが。

家に帰ると、兄さんたちが部屋でエレキギターをいじっていた。

「ただいま」

声をかけると、二人が同時に顔を上げて笑う。

「おう、おかえり」

「おかえりなさい」

何となく兄さんたちと話がしたい気分だったので、僕も中へ入った。

「何やってるの？」

尋ねれば、弦を交換していた朝兄が言う。

「久しぶりに弾こうと思ったたら切れたんだ」

「一年近く放置してたからね」

両親に買ってもらったエレキギターは、二人で一つだった。だから、僕は二人が同時に演奏しているのを見たことがない。

「珍しいね」

と、二人のそばに腰を下ろす。

「今日はどうだった？ 仕事だったんだろ？」

「うん。打ち合わせだけね」

「ご飯はちゃんと食べてきた？」

「うん、マネージャーさんが奢ってくれたんだ」

「へえ、良かったな」

「これからが本番だもんね、頑張らないと」

「うん」

手を動かす朝兄と、それを見つめる夜兄。

僕はただ、そんな二人を見つめていた。

「兄さんたちも、プロになりたいって思ったことある？」

「え？」

と、朝兄と夜兄が同時に僕の顔を見た。

僕が返事を待っていると、夜兄がにっこり笑う。

「あるよ。高校でバンドやってた時にね」

朝兄はまた作業を始めながら、付け加えた。

「でも俺はすぐに諦めたな」

「俺は高校出るまで諦めなかった」

と、夜兄。

「収入が不安定だと、父さんと母さんが不安がるからな」

「大学に入って、自分に才能がないって分かって諦めたよ」

「本当は？」

二人が戸惑う目をした。好き勝手やってる僕が、聞くようなことではなかった。

ちらつと二人が目を合わせ、朝兄が口を開く。

「俺は今のままが良い。諦めてなかったら、お前はバンドやってないかもしれないだろ？」

「……確かに、心残りはあるよ？ だけど、俺も今の生活が楽しいから良いんだ」

二人が優しく笑って、呆然とする僕を引き寄せる。

「ちょ、ちよつと、何して」

頭をぐしゃぐしゃに撫で、抵抗する僕を抑えつける。僕は誤魔化されていた。

けれども、兄さんたちが楽しそうに笑っているのを見ると、何だか胸がきゅんとなる。

あの頃に、戻ったようだった。

負けないくらいの何か

公式サイトのリニューアルに伴い、メンバー全員がそれぞれにブログをやることになった。事務所にはすでに何通かファンレターも届いており、ブログをやることでさらにファンとの距離は縮まるという。

「ブログの名前、どうしようかなー」

最近ではブログをやらない人の方が珍しいくらいだから、当たり前のことだった。

「いくつか候補はもらったんだろ？」

「うん。でも、最終的には自分で決めて良いよって言われたの」

公式ブログになると、まずそれを用意するにも時間がかかるもので、初めにキオのブログが開設されることになった。

「好きな言葉を組み合わせた方が良いかなあ、とは思っただけど」

と、キオが唸る。適当でも構わないと小野さんは言うが、やはりタイトルは重要だ。

「白っぽい背景で文字がピンクとか青だから、なんかそういう感じが良い」

「アドバイスしようにも分かりにくいわっ」

友一の突っ込みにキオが笑う。

「だよねえ。うーん、どうしよう？」

僕は何も言わず、ただ別のことを考えていた。

「そっだ、ボクってどんなイメージ？」

「チビ」

「ガキ」

「そうじゃなくてー」

届いたファンレターのほとんどがキオ宛だったからか、浩美と友一はやる気をなくしていた。ヴォーカルはどうしたって目立つし、

人気が出るのも仕方がない。

「もつとこう、カワイイ！　とか、抱きしめたい！　とか」

「あんまり調子に乗りすぎると怒るぞ」

と、浩美が言い、キオが首を傾げる。

「誰が？」

「友一が」

「俺のことがい！　浩美も調子乗ってるんやないか？　ああ？」

でも、事務所の狙い通りに僕にもファンが付き始めていた。早くも、惚れられてしまったし。

「やっぱ、カラフルわたあめにしようかなあ」

浩美と友一が口喧嘩するのにも構わず、キオが言う。

「ふわふわでいろんな色がある感じ。どう思う？　愛斗」

「え？　……う、うん、良いと思うよ」

とつさに相づちを打ったものの、キオは僕の考えを見抜いて笑う。

「じゃあ、決定ね」

あれから一週間。

純はまだバンドメンバーを見つけ出せずにいた。知り合いを紹介しようかと言ったが、断られてしまった。自分の力でやりたいから、と。

僕はそんな彼をずっと心配していたが、仕事の際は仕事に集中しなければならぬ。

ストレスは確実に溜まっていた。

ライブをいくつこなす内に、僕らはそれぞれに気づき始める。

「マイク……買いたいな」

「もつと、他の弦も試してみたいな」

「俺も、ちよつと見直そうかな」

「ペダル、やっぱり変えとけば良かった」

それまで知っていた場所とは、大きく違うステージ。自分たちの

所有している機材が少ないだけに、せめて他のバンドに負けなくらいの何かが欲しい。

「実力もそうだけど、使う物によっても変わってくるからね」

小野さんの言葉に、僕は頷く。

メジャーで活躍するミュージシャンたちから、もっというんなことを学んで、他の仲間たちからも情報をもらって。

「焦ることないよ。君たちは、これからなんだから」

「はい」

今のままでは、いけない。この先へは、行けない。

音楽活動に専念するため、僕はアルバイトを辞めた。

浩美もキオも、友一も近いうちに辞めるという。

お金は確かに大切だが、僕らは今、岐路に立たされている。この先に、目指すものがあると信じて、僕らはその道を選ぶ。

慣れなければいけないこと

キオのブログが出来上がり、次に友一と僕のブログが開設された。

「……何で俺が最後なんだ？」

「だってお前、ベースやもん」

「普通、ドラムが最後だろ？」

「だってマナトは俺らのリーダー、核やもん」

携帯電話のボタンをぶちぶちと押しながら、友一は楽しそうに記事を書いている。

「ご、ごめんね？」

思わず僕が謝ると、浩美は溜め息をついた。

「ふん、別にいいさ。俺にもファンレター届いたしな」

と、友一へそれを見せびらかす。

「な、ム力つく奴やなあ。たった一通だけやろー？」

「そういうお前はまだゼロだろ」

「でも読者の数はすでに二桁越えたで」

「え！？」

反応したキオが目丸くして友一を見る。

「何や、どうした？」

自慢げにキオを見る友一。

キオは自分の携帯電話に目を落として言う。

「二桁は当たり前だと思ってた……」

「何やと！？」

今度は友一が大きな声を出した。その横で浩美が笑い声を漏らす。

「わ、笑うな！ まだ出来上がって三日やぞ？ これからや！」

「そうだな、せいぜい頑張れ」

「そつえば、愛斗は？ もう記事書いた？」

「え、うん……一応、一日一回は書いてるけど」

僕はあまりインターネットに依存していないおかげで、記事の書き方がよく分からなかった。

「どんな風に書いてるの？」

と、キオが僕の方へ寄ってくる。携帯電話を取りだし、送信ボツクスを開く。

「えっと、こんな感じ……」

昨日ブログに載せた文章をキオへ見せると、浩美と友一までのぞき込んできた。

「今日はスタジオでした。その後、仲間たちと食事をして解散」
読み上げたキオが、三人を代表して言う。

「みじかつ」

「え、そうなの？」

ブログは日記みたいなものだから、それくらいで良いのだと思っていたのだけれど、違うのか？

「俺の見てみー、ほら」

と、友一が携帯電話の画面を僕へ見せる。

そこに書かれていたのは、スタジオで浩美がトラブって大変だった、とか、みんなで食べた料理が美味かった、とか、そういった詳細ばかりだ。そしてそれは友一流にアレンジされていて、とても面白い。

「……こ、こんなにすごい文章、僕には書けないよ」

「でも、読んでくれる人を思うと、これくらい普通だよー」

と、キオ。

「そうかもしれないけど……」

ブログなんてやったことないから、全く分からない。

「まあ、お前の場合はクールで通ってるから良いんじゃないか？」
と、浩美。

「友一みたいに書いたら、キャラが崩壊するぞ」

「あ、そうだね」

そういえばそうでした。

「普段の愛斗をそのままさらけ出したら幻滅だよなぁ」

「げ、幻滅って……」

さすがに言いすぎだと思う。

「確かにそうやな。今のちょっと堅いくらいの書き方がちょうどええのかもな」

結論、無理して読者を意識することはない。僕はクールを演じればいい。

「けど、たまには別の一面も見せなきゃね」

と、キオは僕の肩に腕を回すと、右手に持った携帯電話を掲げた。僕が戸惑っている内に、カシャツと音が鳴る。

「え？」

写真？

「ブログに載せるんだよー。今日は打ち合わせで、マナトくんがたまたま隣にいたので撮ってみましたー、って」

僕は目を丸くした。あの、どういうことですか？

「そついや、他の人もやってたな。おし、俺とも撮ろうや」

と、今度は友一が僕の隣へ来る。

「え、ちょ……」

再び電子音。

「よっしゃ。きっと見てくれる人らが喜ぶでー」

僕は何が何だか分からなかった。だって、ブログは日記みたいな物だよな？

頭を悩ませる僕を見て、浩美が言った。

「どうした？」

「え、いや、あの……えっと、写真って、ブログに載せられるの？」

三人が固まった。

「だ、だって、ブログって日記だよな？」

三人が気まずそうに顔を合わせる。いくつかひそひそ話をした後、それぞれに口を開いた。

「愛斗、インターネットとかウェブは分かるよね？」

「う、うん。あんまりやらないけど」

「携帯電話にカメラ機能があるのは知ってるな？」

「もちろん」

「で、ブログに写真を載せるのは今では主流なんや」

「……？」

「だからね、載せられるの」

「文章だけでも良いが、写真があると分かりやすいだろ？」

「それに、写真があるともっとおもしろいブログになる」

「そ、そうなんだ……」

知らなかった。

「マナトがまさかインターネットに疎いなんて、ブログに書けないよ」

「まあ、良い勉強になったな」

「素のマナトは、ほんまにアホなだけやな」

何だか申し訳ない気持ちになってきた。別に機械が苦手とか、そういうことはないのだけれど、どうも僕はテレビの方が好きだし、暇な時はドラムの練習に当ててしまう。携帯電話でウェブなんてお金がかかるだけだから全然見ないし、パソコンは兄さんたちと共有しているので必要なことしかやらないのだ。

「……ごめん」

どうやら、僕にはもっと他に慣れなければいけないことがあるようだ。

加えられた過剰な演出

「……この前も、そんな顔してた」
「え？」

隣に寝転んだ純を見る。

「愛斗、疲れてるんじゃないのか？」

僕は天井を見上げて答える。

「うん、そうかも」

純と会うのは週に一度のこの時間だけ。翌日が休みなら純の部屋に泊まっていくけれど、仕事があるとそうはいかない。

「何か、違う意味で不安」

「違う意味って？」

「ごろりと寝返りを打って言う」

「愛斗が壊れないか、とか」

僕は笑った。

「壊れないよ、僕は」

と、純の髪の毛に触れる。

「純と違って弱くないもの」

「……うん」

僕に背を向けた純は小さかった。

「大丈夫だよ、純。安心して」

声をかけても、届かない。

「オレ、準備は出来てるから」

と、また弱気なことを言う。

「……純、僕は準備できてないよ」

だから離さない。

「……うん」

純を、独りぼっちになんかさせないよ。

季節に流された訳じゃないけれど、気づくと木枯らしが吹いていた。もうすぐ冬だ。

「クリスマスライブ、出るからね」

と、小野さんは言う。

「え、本当ですか？」

「うん。レベル主催のイベントでね、まだ詳しいことは決まっていないけど、きつと良いライブになるよ」

「クリスマス……メリークリスマス！」

「キオ、落ち着け」

「にしても、面白そうやなあ。わくわくしてきたで」

「うん、そうだね」

クリスマスライブに出るのは初めてだった。まだ結成して二年も経っていないから、当たり前か。

「その代わり、年末年始はお休みだよ」

と、小野さん。

僕らは着実に人気を集めていた。浩美のブログも来週には用意できらしく、レベルに所属して初めて出したシングルの評判もそこそ良い。

「来年はセカンドシングルから始めるよ。お正月のんびりしすぎて、気を抜かないようにね」

「はい」

「で、最近の予定は？」

「明後日、雑誌の取材だね。撮影もあるからきちんとするように」
「了解」

「後は……あ、日曜なんだけど、キオとマナトの二人に取材」

「またですか」

「今のところ人気の二人ばっかしや」

と、文句する浩美と友一。

「仕方ないでしょ。その内に単独インタビューとか入るから、我慢

して」

と、小野さんは二人へ笑う。

安易に信じるものではないが、それでも僕らが波に乗っているのは確かだった。一年後には、ワンマンライブだって出来るかもしれない。

「マナトには彼氏がいるってお聞きしましたが？」

「ああ、はい、います」

公式サイトのプロフィールには、なぜか恋人の有無が書かれていた。もちろん、僕には彼氏がいる設定だ。……実際にいるけど。

「詳しく聞かせてもらっても良いですか？」

「えーと……」

僕は困った。隣に座るキオに目をやって、助けを求める。しかしキオは言った。

「この人の彼氏、可愛い人なんですよー」

「えっ」

「会ったことあるんですか？」

「もちろん。っていうか……」

と、僕に目を向けるキオ。言ってしまうえ、という視線だった。

「……べ、別に普通の人です。一般の人ですよ」

「ああ、そうなんですか。では、キオは？」

「えー、公式で不明ってなってるから答えられないなあ」

「ですよー」

キオはその性格のためか、記者とすぐに意気投合してしまう。羨ましい限りだ。

「じゃあ、どんな人が好みですか？」

「んー、しっかりしてる人かなあ。ボクがこんな性格なんで、突っ込んでくれる人が良いです」

「確かに止めてくれる人がいないとダメだね、キオの場合」
と、僕。

「それでも普通でいるつもりなんだけどもねえ」
そう言ってキオが苦笑する。

「普段は誰が突っ込み役なんですか？」

「え、どうだろ？」

「うーん……僕かな？ 友一の暴走は浩美の担当だし」

「あれはただ喧嘩してるだけだよー。あの二人は喧嘩するほど仲が
良いから」

「そうだね。となると、やっぱり僕でしようか」

「なるほど」

「ステージでは後ろにいるんで、あんまり突っ込めないんですけど
ね」

ブログは便利なのだけど、どこかでとんでもない情報を得てくる
ファンもいる。

「キオとマナトがデキてる？」

「これ、見て」

と、僕はこの前の取材が載った雑誌を開く。

「この部分だと思うんだけど」

指さした箇所を小野さんたちが読む。これまでも出来上がった
ものが予想と違っていたことはあったが、今回ばかりはスルーでき
ない。

「お前ら……そーゆー関係にしか見えへんなあ」

友一の言つとおりだった。

加えられた過剰な演出を真に受けると、僕もキオも恋人同士にし
か見えなかった。

「この記者、腐女子なんじゃないか？」

と、呆れて浩美が言う。

「どうしたらいいですか？」

僕とキオが困惑した目を向けると、小野さんは言った。

「キスしちやえば良いじゃない」

「え？」

「は？」

「何事も前向きに考えなくちゃ。だって、キオは恋人がいるか分からないんだし、マナトには彼氏がいる。で、キオは男」
呆然とした。

「まあ、嫌ならただの噂で留めておいても良いし、ヴォーカルとドラムがデキてるってのも面白いと思うけどね」

と、おかしそくに笑う。……そういう問題なのか？

「……マナト」

と、キオが上目遣いにきゅっと僕の袖を掴む。

「ちょ、何してるの」

すぐに僕は嫌がって振り払う。キオと恋人同士なんて、キャラでも受け入れがたかった。

突然な言葉

純はやっぱり、僕とキオがデキてるなんて聞いたら嫉妬するだろう。

「最近、どう？」

「うーん、忙しいかな」

「給料って、いくらぐらいもらってるの？」

「え？……僕は曲作ってないから、そんなにもらえないよ。あ、でも取材はよく受けるから多いのかな」

細かいことはあまり気にしないので、誰より多いとか考えたこともなかった。

「そっか」

純は笑ってくれる。

なるべく彼を心配にさせないように、不安にさせないように、僕は余計なことを言わないことにしていた。

「おかえり、遅かったね」

「うん、ただいま」

帰宅したのは、夜中の十二時を過ぎた頃だった。

「また純くん？」

「うん」

待っていてくれたいた夜兄へ適当に返事を返し、僕は自分の部屋へ向かう。

「お風呂は？」

「明日、シャワー浴びてくよ」

夜兄には悪かったけれど、僕は相手をする気になれなかった。

「そう。おやすみ……」

「うん」

僕は疲れていた。

翌朝、僕は少し寝坊した。急げば特に問題などない十分程度の寝坊だった。

「おはよう、愛斗」

「おはよう、兄さん」

慌ててシャワーを浴びてきた僕は、髪の毛が濡れたまま部屋へ靴を取りに向かう。

「ずいぶん急いでるな、あいつ」

「寝坊したんだって」

朝兄と夜兄の会話を背に、あれやこれやと持ち物を確認する。そうだ、今日は夕方から知り合いのライブに行く予定だった。その後はたぶん、別の知り合いと飲み会だ。

「今日は友達と飲みに行くから、遅くなる」

そう言いながら居間へ戻り、夜兄の用意してくれた朝食にがつつく。

「うん、分かった」

と、夜兄は相変わらずのんびりと食事をする。

今はまだ人気がそんなにないからイマイチだが、浩美と友一はすでに自分のピックを作ってもらっていた。僕もその内にファンへ物を投げなければなくなるのだろう。他人のライブを観ていると、本当にそう思う。

朝兄と夜兄がちらつと目を合わせた。

「なあ、愛斗」

「何？」

目を上げると、朝兄が僕をじつと見つめていた。

「俺、実は一ヶ月前から付き合ってる子がいるんだ」

「え？」

意味が分からなかった。何で、わざわざ僕に言つのだろう？

「同棲も考えてる」

「……へえ、良かったね」

兄さんが幸せになれるなら、良いと思った。
すると、今度は夜兄が口を開く。

「三人で暮らすのも良いけど、俺も実家に戻ろうと思うんだ」
「は？」

さらに意味が分からない。

「契約切れるまで、ここにいてつもりだけどね」

「……そ、そう」

二人が何を言いたいのか、全く分からなかった。唐突すぎて、考えがまとまらない。

沈黙が続く、僕は先に席を立つ。

「ごちそうさま」

食器を流しに持って行き、洗面所へ向かう。髪を乾かさなければならぬと思った。

「愛斗」

途中で朝兄が僕を呼び止める。

「お前も、もう一人で暮らして良いぞ」

「……」

あまりにも、突然な言葉だった。

家を出てからも、僕はずっと考えていた。

僕を一人にさせてくれない兄たちが、突然離れたがるなんて。それどころか、一人暮らししても良いなんて……信じられない。

まったく意味が分からなかった。

喜びの報告

「今さら？」

「だってそれしかないだろ？」

浩美に聞き返されてしまい、僕は戸惑う。

「でも、突然すぎるってゆーか、何ていうか……」

確かに、僕はこの時をずっと待ち望んできたわけだけど、いざ訪れてしまうと変な気分だ。

「良かったじゃないか、晴れて自由の身だぞ」

「うーん……そうなんだけど、納得いかない」

ようやく『弟離れ』してくれたのは素直にありがたいとしても、やはり突然すぎる。

「あつちから言ってきたんだから、お前が悩むことないんじゃないか？」

と、浩美は言う。

「分かってる。けど……」

突き放されたような気がしていた。これまでずっとそばにいたのに、繋いでいた手を突然離されたような、寂しさ。

浩美は溜め息をつく、俯く僕の頭に手を載せた。

「今は仕事だ。余計なことは考えないで集中しろ」

「……うん」

と、僕は浩美の手をどけた。

昼食を終えた頃、純から電話がかかってきた。明るいうちに電話が来るのは珍しい。

「どうしたの？」

僕が尋ねると、間髪入れずに純が言う。

『メンバーが決まった！ これで、また活動できる！』

喜びの報告だった。僕も嬉しくなって、彼へ言う。

「良かったね、純」

「うん！ 愛斗が励ましてくれたおかげだよ！ マジありがとう！」

次に会う時はお祝いとしてケーキでも買っていこうかと思う。

「あ、もしかして仕事中だった？」

ふと我に返った純がいつもの調子で尋ねる。

「うん、今は休憩中だから大丈夫だよ」

「そうか……つい、嬉しくなっちゃってさ。急にごめんな」

「気にしないで。僕も気になってたことだし、良い報告が聞けて嬉しいよ」

「うん。ありがとう、愛斗」

「いえいえ。これから、お互いに頑張ろうね」

「うん……愛してる、愛斗」

自然と僕も微笑んで、言う。

「僕もだよ、純」

それから純が「今日は、これから何するの？」と、聞いてくる。

「二時まで打ち合わせ。ひたすら話し合いだよ」

「大変そうだな」

「体力使わないから楽だけど、やっぱり疲れちゃうね。その後は時間を潰して、ライブに招待されたからみんなで行ってくる」

「そっか。……がんばれよ、愛斗」

「うん。純も」

「……おう。それじゃあ、またな」

通話が切れると、僕は息をついた。携帯電話を閉じて、考える。誰と話してたの？

突然声をかけられて、びくつとした。

「お、小野さん……」

いつの間にか小野さんが、にっこり笑って僕の隣へ来ていた。

「午前中は元気なさそうに見えたけど、今は元気そうだね」

「……はい、まあ」

携帯電話をポケットへしまい、僕は前を見る。

「何か良いことあった？」

「はい。心配事がひとつ、解消されたので」

いつものようにそう言っただけ僕は笑う。他にも心配事はあったけれど、今は嬉しい。

小野さんは僕の様子をじっと見て、言った。

「さっき話してたの、彼氏でしょ？」

「え？」

ドキッとした。悟られてやいないかと心配になるのも一瞬で、そんな僕に構わず小野さんは言う。

「ちよつとだけ、聞こえちゃった」

悪気はなかったらしく、少し申し訳なさそうにする小野さん。でも、浩美にキャラを貫けって言われているだけに、不安だったりもする。

「ま、別に何かしたいって訳じゃないから気にしないで」

「……はあ」

とりあえずは、信用することにする。相手はマネージャーだし、こんな小さなことで壁を作るのも嫌だったから。

劣等感に追い打ち

純が新しいバンドで初めてのライブをした日、初めて僕はステージに立つ純を見た。クリスマスまであと一カ月のことだった。

「良かったよ、純。すごくかっこよかった」

他人のライブを見るのはやっぱり好きだ。

「愛斗、今日はスタジオって……」

目を丸くする純へ僕は言う。

「個人練習だから、さっさと引き揚げてきたんだ」

「ああ……そっか、見てたのか」

と、純は照れくさそうに俯く。

「お疲れ様」

にこつと微笑めば、純もまたにっこり笑う。

「愛斗も、お疲れ」

他人のライブを見るのはやっぱり好きだ、色んな事を学べるし、気付けるし、自分の劣等感に追い打ちすらかける。

そんな複雑に絡み合う感情の中で、僕はただ彼を見つめていた。

朝兄があまり家に帰らなくなっていた。彼女がいるというのとはどうやら事実のようで、ホテルや彼女の家に泊まるが増えた。

一方の夜兄は相変わらず家にいて、仕事をしたり、家事をしたりする。片方がいないだけで、その毎日は忙しくなっていた。

僕は相変わらず音楽活動と家の往復で、たまに純の部屋に泊まる。変わったことといえば、純との触れ合いが減ってきた、ということくらいか。

「ねえ、兄さん」

部屋で仕事をしている夜兄に声をかける。

「何？」

手を止めて、振り向く。

僕は扉のところに突っ立ったまま、問う。

「兄さんには、彼女とか、いないの？」

夜兄は笑った。

「いないよ。第一、出逢いがないもの。朝日と違って周りにいるのは、おじさんにおばさんに子どもたち」

「……そうだね」

職場では最年少の夜兄だ。聞かなくても分かることだった。

「朝兄、結婚するのかな」

本当に聞きたかった事を口にする、夜兄が僕をじっと見つめた。
「すると思うよ。来年か、再来年には」

「夜兄は？」

「俺は……まだ結婚したいと思わないね。いろいろ問題もあるし」

問題、という言葉が引つかかる。

「問題って？」

尋ねると、夜兄が僕に背を向けた。

「愛斗には関係ないよ。明日も早いんでしょ？ もう十二時だよ」

答えてくれなかった。誤魔化そうともせず、僕には関係のないことだと言いきる。

僕はそんな兄さんの背中をしばらく見つめて、部屋を出た。

「おやすみ」

何かがおかしくなっていた。それは確かに感じるし、頭でも理解している。それなのに、何がきっかけでこうなったのか分からなくて、もやもやしていた。

クリスマスライブ前の、最後のライブで僕たちは現実を目の当たりにする。

キラキラした瞳で前方をじっと見つめる女の子たち。たまに男子。

「ここって、キャパ何人だっけ？」

「三百五十くらいじゃなかったか」

浩美にそう返されて、キオがうわあと声を上げる。僕も同じ気持ちだ、まったく信じられなかった。

「怖じ気づいてどうするん、テンション上がるやんか！」

と、友一。そう、これは僕たち自身が望んだ場所。

「そうだよな。緊張するけど、頑張ろう」

手にしたスティックを握りしめて、僕は三人を見た。みんながそれぞれに頷いて、呼吸をする。

ステージへ上がると、僕は思いきりドラムを叩いた。クールというのもだいぶ板について、笑わなければ許されることが分かってきた。純のことを想えない時は、緊張すればいい。

浩美のベースと音を重ねて、友一のギターがメロディを乗せていく。キオが歌い始めると、オーディエンスはさらに沸いた。

自分たちが音に飲み込まれていくのを感じながら、その一方で盛り上がるみんなを見て、妙な心地よさを覚えた。

遠すぎる場所

三日ぶりに顔を合わせた朝兄は、唐突に僕へ尋ねた。

「お前たち、うまくやれてるのか？」

「え？」

何のことだか分からなくて、目を丸くしてしまう。

「純くんとだよ」

と、朝兄は笑う。

僕は納得すると、少し考えてから答えた。

「まあまあ、かな」

どうもタイミングが合わなくて、純がしたがる時に僕がそれを拒んでしまうほどのすれ違いが何度かあった。それでも純は僕を好きでいてくれてるし、別れ話もしなくなった。

「近くに越さないのか？」

「え？」

「または、一緒に暮らすとか」

朝兄は僕を一人暮らしさせたい様子だった。

「まだ分からないよ。純とも、ずっと一緒だと思えないし」

素直なことを言くと、兄さんが目を丸くした。

「別れるのか」

「あ、いや、その……」

兄さんが悲しそうな顔をするので、僕は困ってしまう。

「ちよつと、自信がなくなってるだけだよ。どうなるかは分からない」

「……そうか」

朝兄はすると、欠伸をしながら台所へ向かった。

別に、純のことが嫌いになったわけではない。ただ、愛しているという自信を僕はいつの間にか喪失していた。付き合いが長すぎて、

倦怠期が来ただけなら良いのだけれど。

「倦怠期を乗り越えるには、普段と違うことをするのが良いらしい。……お、オレ、もうちょっとお洒落すれば良かったかな」

待ち合わせ場所へ来た純は、僕を見てすぐにそう言った。

「別に構わないよ。純らしくて良いし」

そう返せば、純が「そうだな」と、頷く。

今日は久しぶりに屋外で会っていた。二人の好きなお店を回って、いつもと違うところで食事をすれば、今の関係も回復する気がしていた。

「どこか行きたい場所ある？」

「え、うーん……あ、オレ、服見たい。コートが無くてさ」と、純。

「前まで使ってた奴は？」

「うん、近所の猫に破かれた」

落ち込む様子で言った純を見て、僕は笑う。

「猫じゃあ、しょうがないね」

「あれ、結構気に入ってたんだぜ」と、純。

「そうなの？　じゃあ僕が新しいの買ってあげるよ」

「え、何で？」

歩き出しながら僕は言う。

「いつもご飯、ごちそうになってるから」

僕の隣を歩く純が、恥ずかしそうに俯いた。

「あ、あんなの大したことじゃないけど……ありがとう」
街はクリスマスカラーに染まっていた。

夜兄は言う。

「朝日から、何か聞いた？」

「ううん、特に何も」

「……どうしようかな」

部屋で寝ている朝兄を気にするように、夜兄が言う。

「俺が話しても良いのかな」

僕に対して何か隠し事があるようだった。

少し怯えながら、ドキドキしながら、変な期待をしながら待っている、夜兄が椅子を立った。

「愛斗、純くんとはいつもどこに行ってる？」

「え？ 外に出ることはそんなにないけど、あるとしたら渋谷か、新宿辺りかな」

ライブハウスの多い地域には自然と足が向く。

「朝日だけじゃなくて、俺もそうなんだけどさ」

と、夜兄はカップを二つ取り出して、お湯を注ぎ入れる。

「愛斗に離れてもらいたくなくて、いろいろ調べたんだよ」

「調べたって、何を？」

取り出した紅茶のティーバッグを一つのカップに入れて、兄さんが言う。

「同性愛のこと」

胸がずきんと痛んだ。

「愛斗がどうしてそうなったのかは分からないけどさ、自分とは違うものを受け入れるのって辛いんだよね」

もう一つのカップにティーバッグを移す。

「最初は気にしないつもりでいたけど、朝日はまた新しい女の子に恋をして」

ティーバッグを揺らし、カップの外へ出す。

「愛斗のこと、どうしていいか分からなくなっちゃったんだって」
砂糖をカップに入れて、スプーンで混ぜる。

僕は夜兄から顔を逸らしていた。

「正直に言っと、俺もどうしたら良いか悩んでる」

と、夜兄がカップを僕の目の前に置いた。

紅茶の甘い匂いが立ちこめて、僕はじっとその水面を見つめる。

「愛斗は将来、どうなるの？」

と、夜兄が向かいに座って僕を見る。

「純くと別れて別の男性と付き合うのか、女の子と付き合い合って家庭を持つのか」

「……分からない」

この前のデートで、結局僕は純とキスをした。

「純くんとは、どこまでいってるの？」

「やれることは、全部……」

僕の答えに夜兄が「うん、そうだね」と、納得する。

人通りのない陰でこっそり交わしたキスは、僕が僕を明確にするのに十分すぎた。

「別にどっちがどっちでも構わないけど、想像はしたくないよね」
「……」

僕は彼を知りすぎた。そうすることが自分を支えるだけだと知りながら、彼のいない生活は考えられなくなっていた。

「愛斗は、俺たちが思うほど普通の子じゃなかった」

「……え？」

少し目を上げると、夜兄は紅茶を一口飲んでから言った。

「愛斗は遠いよ。俺たちには遠すぎる場所まで行ってしまった」
もう追いつけない、と夜兄は言う。

「俺たちが先を行っていたはずなのに、いつの間にか越されてた」
それは純とのことだけではなく、音楽のことも言っていた。

「気づくのが遅くて、ごめんね」

夜兄が優しく笑う。

僕は、遠いところになんかなくて。それどころか、みんなに置いて行かれている気分です。

そばにいないはずの純を、確かめた。

この世で一番の男

矛盾している。

「……愛斗、馬鹿なの？」

「え？」

振り返ると、純は僕にしがみついていた。

「だって、来るなり抱きしめて、キスして……馬鹿みたいだ」

僕はようやく我に返った。兄さんの顔から逃げ出して、僕は純を感情のままに求めていた。

「……うん、ごめん」

醒めた素肌に冷気が当たって少し寒い。

「何かあった？」

僕を見下ろす純へ、僕は何でもないと言いかけてやめた。声が震えていた。

「……愛斗」

キスをして僕の唇を塞ぐ。その熱さに少し溺れるだけで、僕は現実に向き合える。

「兄さんと、喧嘩した」

「どうして？」

目を丸くする純を胸に抱き、僕は言う。

「本当はちつとも分かり合えてなかった。僕が、兄さんたちのことを分かっていなかったんだ」

「……うん」

「甘えてた。朝兄も夜兄も、ずっと僕の味方だと思ってた」

けれどもそうじゃなかった。二人は気づかぬうちに、僕から離れていたんだ。それが目に見えるようになったのが、つい最近だっただけ。

「僕はもう何ヶ月も前から、一人だったんだ」

純が優しく僕の心臓に口づける。

「オレがいる」

「うん……、純しかいなかった」

初めの目的はとつくのとうに達成していた。それに僕が気がついて、一人暮らしをしたいと言えれば、きっとそれで終わっていた。

「二人には、本当に悪いことをした……」

「……」

「だけど、純」

声がまた震える。

「僕はまだ、純に縋り付いてる」

「うん」

情けなくて涙があふれた。純は何も言わずに、僕の涙を舌ですくう。

「オレだつて縋り付いてるよ」

もう何もかもが今更だった。あの頃には戻れないし、仲の良かった兄弟には二度となれない。

「愛斗は優しすぎるんだ。無理して分かつとしないで良いのに、悩んでる」

「……」

「余計なことまで抱え込んで、悩んで、泣いてる」

「……うん」

僕はまだ若かった。

「本当にオレのこと、好き？」

「……」

僕はまだ何も知らなくて、僕よりも何かを知っている純の目が、怖かった。

「愛してる？」

「……」

僕はまだ全然垢抜けてなどいなくて、子どもで、青臭くて。

「オレのことが本気で好きなら、そばにいて」

「……」

「本気じゃないって気づいたなら、もう終わりにしよう」

僕はまた涙を溢れさせた。寂しかった、怖かった。

「でもオレは、愛斗がこの世で一番の男だって思ってる。……理想、なんだ」

もう誰にも置いて行かなくて、僕は純を強く抱きしめた。

向き合うべきは純ではなくて、自分自身の気持ちだった。

もつと自分を知ること

風邪だと嘘をついて打ち合わせを欠席した。

一人きりの2LDKは広すぎて、僕は帰ってきたことを後悔した。でも、純の部屋に居続けるのも苦痛だった。

十二月は寒くて、カレンダーはクリスマスまでの日数を確実に数えている。

何かを食べる気も起きなくて、僕はただベッドに寝そべって、毛布の温もりに身を任せていた。

純は、きつと気づいていたんだろう。僕が純の想いを真に受けて、求められるまま行動していたことに。

兄さんは、朝兄と夜兄は、きつと僕を今までと変わらずに愛そうとしてくれた。けれども壁は越えられず、僕から離れて行ってしまった。

人知れず、二人は悩んでいたのだろう。僕が純と遊んでいる間に、二人は。

溜め息が零れた。その音に自分でもびっくりして、はつと気づく。携帯電話のライトが光っていた。手を伸ばして取り上げ、画面を開く。浩美からメールが来ていた。

今日の打ち合わせの内容と、クリスマスライブの概要、それと見舞いの言葉で文章は終わっていた。

「……ああ」

僕は最低だ、最低で最悪の男だ。

向き合うべき僕は、まだ迷っていた。兄さんたちに対する思いとか、純に対する想いとか。夢に対する、情熱とか。

答えはきつと分かっているのに、僕はまだ欠けたピースを自分が隠していることに気づかない。まるで道化だ。

純はそれでも、僕のことを好きだと言って抱きしめてくれるのだ

ろう。何故かその温もりが、今では恋しい。

浩美はふと真面目な顔になって言った。

「俺が、お前のことを本気で好きだって言ったら、どうする?」

「は?」

目を丸くする僕だったが、その手にはのらない。

「普通に断るよ。急に言われても困るし」

すると不満そうな顔で浩美が言う。

「何だよ、お前。つねねえな」

「……あれから半年近く経ってるから」

と、僕。

「まあ、そうだな。で? お前はどっしたいんだ?」

と、浩美が溜め息混じりに問う。

「うん、とりあえず全部白状したい」

「でも怖くて出来ない、と」

「……うん」

情けないけれど、それは本当のことだった。

「あいつは?」

「……別れるよ、たぶん」

浩美がまた溜め息をつく。

「ついに、だな。ま、純には束の間の幸せだったわけだ」

「……」

「あいつのことだから許してくれるだろうが、お前はそれを学んで
もっと自分を知ることだな」

下げた頭が上がらなかった。

「もし、今度別の男にしつこく言い寄られても断れよ」

「う、うん」

「女の場合もそうだな。一ヶ月やそこらで別れるような女は信用する
な」

好みにはまっついていて、ちょっとしたでも気が合うなら良いと思うのだ

けれど、浩美は真面目だ。

「この際だからはっきり言うが、お前は流されやすいんだよ」

「……うん」

自覚していたつもりだったが、改めて言われると痛い。

「だから長続きしないんだろう。純とは何ヶ月だ？」

「え、えつと……六ヶ月、かな。最長記録だよ」

僕が言うと、浩美は先ほどよりも深く溜め息をついた。

「それとな、お前は能天気すぎるんだよ。たまには深く考えたり、断るってことをしろ」

「う、はい……」

「性欲処理の相手が必要なのはよく分かる。だが我慢しろ、したければ一人で勝手にしろ」

そう、言ってしまうえば僕は純を性欲のはけ口にしていたも同然で。

「一人でいるのが寂しくても耐えろ。お前は一人に慣れるべきだ」

浩美の言うことはすべて凶星だった。

「弟離れして欲しいと言ったのはお前だろ？ それなのに、結局お前は一人じゃ何も出来なかった」

「うん……」

「あの二人には感謝するんだな」

そう、僕は兄さんたちに感謝しなくてはならない。

「今の自分があるのは彼らのおかげだ」

「僕もそう思う」

「じゃあ、帰って素直に謝れ。そして感謝しろ」

「うん」

そうするしかないのは分かっていた。ただ、少し勇気が足りない。

「……愛斗さえ良ければ、ルームシェアでもしよう」

「え？」

「事務所の近くに引っ越そうと思うんだ。このタイミングだから、ついでにどうだ？」

と、浩美が僕を見る。

「あ、えつと……兄さんたちに相談してみるよ」

「馬鹿。それがダメなんだろうが」

「え？」

首を傾げると、浩美がはつきりと言う。

「お前はな、兄貴たちに甘えてるんだよ。先に離れるべきなのはお前だったんだ」

ドキッとした。そういえば、そうだ。僕はいつも、何かあるとすぐに兄さんたちを言い訳にしていた。あの二人はブラコンだから……と。

「甘えるのもいい加減にしろよ、愛斗」

浩美は大人だ。

「うん……うん」

僕は頷いた。覚悟を決めて、一息をつく。

「つてゆーか浩美つてさ、僕のこと、よく分かってるよね」

と、話題を変える。僕の知らない僕すら見透かされている気分だった。

浩美は「そりゃ分かるさ」と、言う。

「もう三年も、ずっと一緒にいるんだからな」

いつものように、呆れたように微笑む浩美。

「……そうだよな」

と、僕は視線を逸らす。こんなことを、僕たちは何回だって繰り返してきた。基本的に相談するのは僕だったが、浩美はいつだって僕の話聞いて、最後は的確なアドバイスをくれる。

その距離感が心地良くて、キオや友一には話せないことすら浩美には言ってしまう。浩美はそんな僕に呆れながら、何だかんだでそばにいてくれる。それはきつと、これからも。

「ありがとう、浩美」

浩美は、何も言わずに僕を見ていた。

俺たちの弟

ライブまであと一週間だった。

「ただいま」

帰宅すると、玄関には二人の靴が並んでいた。今日は朝兄も帰っているらしい。

「おかえりー」

と、夜兄の声がして、僕はちよつと安心する。

居間へ向かうと、兄二人がテレビを見ながらくつろいでいた。

「おかえり」

と、朝兄が振り返る。

「うん、ただいま」

僕はそう返し、自室へコートと鞆を放る。

自分の場所に腰を下ろして、僕は言う。

「純と、別れようと思うんだ」

二人が同時に僕を見た。

「本当は僕、純のことは本気じゃなかったんだ。でも、好きだった」

二人はあからさまに戸惑いを見せ、朝兄は俯き、夜兄がテレビの電源を消す。

「僕はただ、兄さんたちに離れてもらいたくて純とつきあい始めたんだ」

ようやく言えた、本当のこと。

「だけど、離れるのは兄さんたちじゃなくて、僕の方だった」

「……愛斗」

僕は真っ黒になったテレビを見つめ、言う。

「騙してて、ごめんなさい」

二人は何も言わなかった。

「僕、二人のことは大好きで、だけど鬱陶しいと思ってた」

三人で暮らすにはちょうど良いサイズの2LDK。

「二人が原因で、彼女と長続きしないって言い訳にしてた」
違った。

「浩美に言われて、やっと気づいたよ。僕の方が兄さんたちに甘えてた、ブラコンだったんだ」

夜兄は僕を見た。

「確かに、そうだったかもしれないね」

昔からずっと一緒だったから、何がどうなっているのかなんて分からなかった。うやむやになっていた。

朝兄が拳でテーブルを叩く。

「離れなきゃいけないのは分かってたさ。だけど、きっかけがなかった」

その表情は読めなかった。僕はただもう一度、ごめんなさいと言った。

「ごめんなさい。僕は、本当にひどいことをした。二人を騙して、純まで騙して、最低だった」

「それでも愛斗は俺たちの弟だよ」

「俺たちの、自慢の弟だ」

僕は一人きりでは生きていけない。

「うん……ありがとう」

朝兄の拳にそっと手を置いて、僕は夜兄を見る。

「朝兄も夜兄も、僕の自慢の兄さんだよ」

他の人には代えることの出来ない、大事な大事な兄たちだ。

「ありがとう」

夜兄がそう言って微笑む。

朝兄は顔を上げると、僕の額にキスをした。

「お前が外で何をしようと、ずっとお前は俺たちの弟だからな」

と、僕を見る。心からの言葉に、僕の心が震えた。

涙が溢れるわけではないのに、声が震えて身体の芯が冷えていく。

「うん……うん。ありがとう、朝兄、夜兄」

だけど、僕にはまだ心残りがある。

「でも、また僕が男の人を好きになったら」

それでも、変わらずにいてくれるだろうか？

夜兄が優しく頷いた。

「それで良いよ。愛斗の人生なんだから、愛斗の好きなように選べば良い」

「ちゃんと、理解してやれないかもしれないけど、傷つけたくはないからな」

と、朝兄。

その、昔からずっと僕に注がれてきた愛情が、嬉しくて。

「……うん」

嬉しくて、泣いた。

飽きるまでそばに

クリスマスライブの三日前、僕は久しぶりに純と会った。外だった。

「……愛斗、今、何て？」

目を丸くする純へ、僕は言う。

「別れよう」

ジングルベルが鳴り響く夜の街で、僕は純を抱き寄せた。

「純の言うとおり、僕は全然本気じゃなかった。だけど好きだった」
「……」

「矛盾してるけど、僕は確かに純を愛してた。ただ本気じゃなかっただけなんだ」

純が僕の背に腕を回して、頷く。

「そうか、やっと分かってくれたのか」

「……うん」

人目を気にせず、僕たちは抱きしめあう。

「僕は流されてた。優しすぎた。だけどね、純」

「……何」

「純のおかげで、どっちもいけるって分かったんだ。恋愛対象は女の子だけじゃないって」

「……うん」

僕は今度こそ、純にも本当の気持ちを伝える。

「こんな僕で良かったら、もう一度愛してくれないかな？」

純が丸い目で僕を見上げた。

「愛斗……？」

「純のことは、まだ納得できてないんだ。依存とか、縋り付くなんてことは言わないから、今の僕を愛して欲しい」

「……」

純は僕から離れると、一步後ろへ下がった。

「今度は、本気？」

「うん。本気っていうか、純のいない生活を考えるのが辛いんだ。飽きるまでそばにいたい」

「……今までは？」

「ただ純の想いに応えるだけで、僕は僕自身の気持ちと向き合ってた。僕はいつの間にか、純を好きになっていた」

純が唇を噛む。

「愛斗、意地悪になっただな」

「そう？」

「だって、別れるって言ったのに……愛して、なんて」

僕はいつものように微笑む。

「だって、一度嫌いになってもらわなくちゃ、僕は純としっかり向き合えないよ。僕のことを好きな純とは、付き合えない」

「……意地悪」

俯く純へ、僕は尋ねる。

「それで、答えは？」

純はしばらく答えなかった。

鳴り響くジングルベルを聞いていた。クリスマスに浮かれる恋人たちを、遠目に眺めた。今年のクリスマスは、僕の人生にとつてとても大事なものになる。僕は確信した。

「良いに決まってるだろ……！」

と、純が顔を上げて僕の胸に飛び込んでくる。その華奢な身体を抱きしめて、言う。

「ありがとう、純。……愛してる」

「オレも、愛してる」

まもなく純は嗚咽を漏らしはじめ、僕はちよつと戸惑った。

「え、もしかして泣いてる？」

「っ、な、泣いてなんか、ねえよ！」

と、顔を上げた純の両目は潤んでいて、すぐに涙を零れさせる。

「……泣いてるじゃん」

僕はそつと涙を指で拭うと、キスをした。堂々と、キスをした。気が済むまで、キスをした。

恋愛対象は女の子だけじゃない。何故なら目の前にいる彼は可愛くて、時折かつこよくて、とても頼りになるからだ。

僕の大切な、大切な彼氏だ。

新しい世界へと

「あれ、そんな指輪してたっけ？」

ライブハウスへ向かう途中、小野さんの助手席へ座った僕は左手を見せて言う。

「婚約指輪です」

後ろの三人が話をやめて僕を見る。

「婚約って、誰とやねん」

「っていつか、それペア？」

「お前、あいつと別れるって」

後ろを振り返った僕は笑う。

「別れたよ。だけど婚約したんだ」

小野さんが前を見たまま言う。

「説明してくれなきゃ分からないねえ」

「そうやそうや！ 説明せえ」

「え、愛斗、相手はー？」

「だから、婚約って普通」

騒ぐ友一とキオだったが、事情を知る浩美は戸惑うばかりだ。

「僕は踏み外した道を信じ込んで歩いてた。けど、それが間違ってた気づいて、道を変えた」

「は？」

「愛斗さーん、戻ってきてえ」

遠回しに僕らしくないと文句する二人。

「そうしたら、僕は確かに少しでも、彼を愛してたって気づいたんです」

「……愛斗、お前」

「今までの全てを無かったことにして、今度は僕の方から告白した。ただそれだけ」

浩美が頭を抱える。

「その内に、一緒に住む約束もあるんですよ。良いでしょ？」
と、僕は小野さんへ言う。

「良いなあ。けどマナト、本番は外してね」

「分かってまーす」

左手の薬指にはめた指輪を、じつと眺める。

後ろで友一が頭を整理している浩美へ声をかけた。

「どうした、浩美。お前、死ぬんか？」

「いや……むしろお前を殺したい」

「何でや！ 俺何もしてへんし」

友一のおかげで車内はまた賑やかになり、僕は笑う。

ライブハウスは前回と同じくらいの大きさだった。二階席も使用する
とキャパシティはさらに増えるという。

リハーサルのために舞台へ上がると、今はまだ誰もいない向こう
側が輝かしく見えた。時間が来れば、ここは人で埋め尽くされる。

「キオ、それ……」

ドラムセットを前にして、僕は前に立つキオに思わず声をかけて
しまう。

「え？ ああ、これのこと？」

「うん」

キオは赤くて先に白い飾りのついた三角の帽子をかぶっていた。

「私物です」

と、きらりと目を輝かせる。話を聞くと、前回の打ち合わせで決
めたことらしかった。

浩美と友一の準備が整い、キオがマイクに向かって叫ぶ。

「メリークリスマス！」

僕がドラムを叩き出せば、浩美も一緒になってリズムを生み出す。
友一のギターがこの季節に似合う高音をかき鳴らす。

僕らが歌うのは軽快なリズムのパンクロック。聞いてくれる人た

ちがみんな笑顔になってくれるよう、祈りを込めて演奏をする。
キオの歌声に僕らは思いを馳せ、少しでも何かが届くようにと願う。

軽快なリズムを叩く僕は、きっとこれからもこの場所で生きていく。

忘れられない人を想いながら、忘れられない思いを胸に抱いて、新しい世界へと走り出す。

e n d

新しい世界へと（後書き）

本編はこれで終わりです。
今までありがとうございました。

後日談：ずっと気になっていたこと

ずっと気になっていたことがある。それは、互いに。

「小野さんって、実はゲイですよね」

「ひろ美くん？ いきなり君は何を言い出すのかな」

苦笑する小野マネージャー。

浩美は溜め息をつく、もう一度言った。

「目が怪しいですもん」

「……あのねえ」

とりあえず場所が悪いので、人気のない隅っこへ寄る。

「仕方ないから告白するけど、僕はバイだよ」

と、小野は言った。

「やっぱり」

浩美の言い方にはどことなく棘があり、小野をいらつかせる。

「でも今は嫁がいるし、来年には子供だって生まれる」

「そうですか」

「だから、君たちには頑張ってもらわなくちゃならないんだよ」

「……俺」

と、浩美が声を出し、小野は彼の方を見た。

「失恋しました」

相手は言わなくても分かっていた。だからこそ、小野は言う。

「可哀想に」

「……最初から、選択を誤っていた気がします」

「そうなの？」

「……あの時は、どっちも本気になるなんて思わなかった」

浩美が溜め息をつき、両のまぶたを押さえる。

「自業自得って奴です」

「うん……じゃあ仕方ないね」

「……仕方ないなんて言わないで下さい。マジで泣きそうなんだから」

そのまま顔を上げない浩美を見て、小野は言う。

「もう泣いてるじゃないか」

「……っ」

浩美が涙をこぼすたびに、小野は昔のことを思い出す。

「ただ、バイって言っても、僕の場合は何もしてないんだよね」

「……」

「ただ男の先輩にあこがれてた。本気で抱かれたと思ってた」

「……」

「それだけで、男性経験はないよ。そこ、勘違いしないようにね」

浩美は構うことなく、ぼつりと話し始める。

「俺……あいつが幸せなら、それで良いと思ってた。けど……今になつて、自分を押し殺してただけだつて」

「気づいちゃったんだ？」

「……そばにいただけで満足なはずなのに、抑えられない」

「切ないね。僕もあの頃は悩んだし、苦しかった」

小野は言いながら、彼の肩に腕を回した。ぽんぽんと叩いて、慰めてやる。

「でもさ、今まで我慢できたんだから大丈夫だよ。彼のそばに居続けられる」

「……おかしく、なりそうだ。最初から全部諦めたふりして、笑ってた。……俺は、馬鹿だ」

「忘れることが出来ないなら、せめて今は関係が続けるしかないよ」

「……っ、分かってる」

「それにほら、君たちは相性ぴったりじゃないか。彼と一緒にリズムを刻めるのは君だけだよ」

浩美の肩が揺れた。少しだけ顔を上げて問う。

「……知って？」

「見てれば分かるよ。君は彼にとっては頼れる兄だし、親友だし、

仲間で、ある意味特別な関係にいる」

浩美は唇を噛んだ。両の拳を握りしめ、感情を抑える。

「もしかすると、他の二人も知ってるんじゃないかな？ 二人とも、空気読める子だからねえ」

「……」

「ただ、本人だけが知らないって言うか。彼、結構鈍感だもんなあ」

「……どうしたら、良いですか」

「そうだなあ、とりあえず彼の幸せを祝福してあげようよ」

と、小野はにっこり微笑む。

「望んだことが叶う訳じゃないだろうけど、別の誰かを好きになれるように努力しよう」

「……はい」

「僕だって、忘れるまで苦勞したよ。まあ、ひろ美の場合は……もつと苦勞するかもね」

震える肩を強く抱いて、小野は言う。

「苦しいだろうけど、今はもっと多くの人たちに『ラティ』の歌を届けよう」

「……っ、……はい」

浩美は口をぎゅっと閉じ、溢れる涙を指で拭った。

叶わなかった。けれども小野は今を生きている。

叶わなかった。けれども浩美は、これから彼のそばで自分の音を響かせる。

後日談：少し早い春の日

純の部屋は狭いけど、兄さんたちのおかげですつきりしていた。

「二人で暮らすんだったら、これからはこまめに掃除しないとダメだよ」

と、夜兄は純へ言う。

「あ、はい。すみませんでした」

「愛斗も純くんに任せるんじゃないくて、ちゃんと自分で出来ることはやるんだよ？」

「う、うん。分かってるよ」

「あ、あとベッドだけど」

と、夜兄がそれに近寄る。

「汚れたらすぐにシーツは取り替えること。あとあんまり激しくしないようにね。ベッドなんて高いんだから、気をつけてよ」

何も言い返せなかった。言うとしても、いつも床でやってるから平気、くらいで。……実際に言ったら、いろんな意味でどん引きされそうである。

「他にゴミはないか？」

戻ってきた朝兄がずかずかと部屋に入ってくる。

「ああ、朝日。この子たちに何か言うことはない？」

「言うこと？」

朝兄は室内を見渡すと、言った。

「あー、来月あたりに俺もこの近くに引っ越すから」

僕と純は顔を見合わせ、夜兄は言う。

「ずるい！ 何で俺に黙ってそんなこと」

「違うんだよ。彼女がこっちで良い部屋見つけてさ、まだ確定はしてないから安心しろ」

「そう言いながら、決めちゃうんでしょ？ 見損なったよ、朝日」

「はあ？ だから俺じゃねえって言ってるだろ！ だったら月夜も引つ越せばいいじゃねえか！」

「そんなこと …… 弟の幸せを邪魔するのは、気が引けるからいいよ」

と、保護者のような目で僕らを見る。

「俺は朝日よりも大人だから、三ヶ月に一度会いに来るだけで我慢するよ」

「あ、あの、できれば半年に一度……」

僕が言つと、落ち着いた朝兄が言つ。

「そうだ、半年に一度で良いじゃないか。俺は彼女の理解は得てるし、たまに食事に招待してやるけどな」

と、僕らに向かってにつこり微笑む。

「あー！ やっぱり越してくる気満々じゃん！ 我慢してよ、朝日！」

「何だよ、近所なんだから良いだろ？」

「……っ、せめて職場が近ければ良いのに」

と、悔しがる夜兄。ここからだと言兄さんの通う小学校まで電車で一時間はかかる。残念ながら、どうしようもなかった。

「なあ、愛斗」

「ん、どうしたの？」

僕の袖を引つ張る純へ顔を向ける。

「やっぱりお前の兄貴、ブラコンだな」

「はは、本当にね」

僕は笑うしかなかった。兄さんたちと別れるのは名残惜しいが、純がいるなら構わない。

「愛斗、何かあったら朝日じゃなくて俺に連絡するんだよ」

と、夜兄。

「俺、実家にいるから母さんにもつながるし、すごく便利だよ」
どうやら夜兄は僕とのつながりをどうしても持ちたいらしい。

「何言ってるんだ、俺の方が近くて便利だぞ」

「ダメだよ、朝日は彼女を大切にしていあげなきゃ。その点、俺は相手がいないから身軽だよ」

必死すぎる。

「あ、ああ、うん。場合によって、相談する相手は選ぶよ」と、僕は返す。

「選ばなくて良いよ。俺の方が良いって」

「俺ならすぐに助けてやれるから俺にしろ」

「えっと……あの、じゃあ、二人に相談するから」

兄さんたちが睨み合う。

「……仕方がないね、百歩譲って許そう」

「だが本当に信頼できるのは俺だってこと、忘れるなよ」

僕はただ苦笑する。見ると、純も苦笑していた。

これからどうなるかは分からないけれど、何か楽しいことが待っているような気がした。

少し早い春の日だった。

設定 +

< 人物設定 >

鈴木愛斗
すずきまなこ

21歳 176?

鈴木朝日
すずきあさひ

26歳 178?

鈴木月夜
すずきつきや

26歳 178?

高野純
たかのじゅん

23歳 174?

山田浩美
やまだひろみ

22歳 181?

キオ / 佐藤清男
きお / さとうきよお

21歳 162?

前田友一
まえだゆういち

21歳 170?

小野マネージャー
おの

28歳 175?

< ブログタイトル >

キオ：カラフル わたあめ

ゆーいち：ポジティブパンキング

ひろ美：ヨリドリ美ドリ

マナト：愛色モノクローム

<ファンによるファンの為の非公式カップリングランキング>

1 マナト×キオ

2 キオ×マナト

3 マナト×ゆーいち

4 ひろ美×キオ

5 マナト×ひろ美

マナトには実際に彼氏がいるんだから妄想するのは良くない、というファンもいるようです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7805m/>

僕と彼氏と兄二人

2011年2月12日17時40分発行